
IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 何回か転生(?)する人の物語

【Zコード】

N7031Y

【作者名】

起源はきっと厨二病の人

【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た!そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残つてみせる!」と頑張る物語

プロローグ的な（前書き）

はじめまして起源はきっと厨二病の人です
この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなつてしまいますが暖かい目で見守ってくれるとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんな〇〇じゃないなどといったものがあると思いますがそれが嫌な人は戻ることをお勧めいたします（汗）
それでもよければぜひともご覧ください

プロローグ的な

皆はよくネットで見るような一次創作のよつて自分が転生や憑依、トリップをしてみたいと思つたことはあるだろつか？

俺もつらやましいと思つていたが・・・まさか、何処にでもいそつな一般ピーポーの自分が経験するとは思ひもしなかつた、、、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わり自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してPS3を起動し、ACfaを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

そして現在

ここに来て（？）から建物内をちょっと調べてみるとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかつた。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

（それにしてもさつきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・？）

などと思つても実際に体に怪我などをしているわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような……」

とほそりとつぶやいた瞬間、ふと勘つを急いで近くのトイレスルートに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

（なせ今まで気づかなかつた！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

「A G f 」を始める「リリウムたんマシ」に変じよ テレビからなその光が！ 知らない天井だ 俺、若返りました 今ここ

「面倒なことになつた……」

「悩んでいても仕方ないな。建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前にきた
横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィック
がある

(なんだ、これは？)

映画に多く出でるような手を触れてしまはうかな？
試しに触つてみるか）

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLEX TEという文字が浮かびでかい扉が重たい音を立てながら開いた

(なんか開いたよー)

そしておれのおれ入っていくところがあったのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものす」く見覚えがあるんだが、まさかな・・・

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそつとため息をつき、呟いた

「面倒なことになつた・・・

プロローグ的な（後書き）

最初から駄文ですいません……

これから頑張っていきたいのでもろしくお願いします

第1話（前書き）

すいません今回も駄文です…
戦闘の描写が下手だつたりしてわかりにくいかもしだれませんが許してください（汗）

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれませんがそういう辺は「」で承してください

俺はとりあえずあのAC中に乗つてみるとした
そして不思議なことに身体が覚えているように次々と「クピット内
を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とい
のACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ
ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ
要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたら
しい

なんともまあ良くてできた「都合主義なことで

そつ思つていて「クピット内からローラーと音がする音をし
たほうをみてみるとそこには携帯端末らしきものがあつてあり画面
には依頼主とかいてあつた

（マジかよ・・・）

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思つた
のだが
この世界に来たということは戦場にたつかもしれないといつて、
すなわち死と隣りあわせということである
そう思つと携帯端末にを取つとしている自分の手が急に重くなつ
たのだ

実際はその手に何か重いものが乗つたわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さつきA C内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこっちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといつても人殺しは人殺しだ戦場だつたからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足搔くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のはうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやつと決心して携帯端末を手に取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？ 隨分と遅いんじやないか、死んじまつたかと思つたぜ」「ガハハ」と相手の男は笑いながら言つた

「すまない、少し仮眠をとつていたものでな」

「おいどうした？ いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいなんがあつたのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かつただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかつたが」

「ああ、氣づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、やうだつたそつだつた」

と男はまるで今思い出したかのように笑つた言つた

（どうやらこの電話の男とこつちの俺は知りあいようだな）

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつもどおりのマーブルに

2時間後に来てくれ

「わかつた2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切つたのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあるデータを見る
ことにした

そして2時間後

彼はマーブルという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせつていたが携帯端末内に地図も
あり看板もでかいためすぐに見つけることができた

（それにも色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争
の最初のほうみたいただな

まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだしな）

そう思つているとこちらに向かつてくる身長が2メートルぐらいあり
りそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさつきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言つてきた

「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそれりへ携
帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容をみた

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰
すことであった

（大企業の兵器開発工場ということはネクストGAあたりのネクス
トを作つているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともい
えないが）

レイジがそう考へていると

「どうした？ 何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安でな
敵の新兵器でも出でてくるんじゃないかと思つてているだけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだが「ジマなんぢやらを動力源として動かすAC
を作つてているみたいだ」

「つ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？ でたらすぐにお陀仏じ
やないか！）

「その新兵器に対する情報はあるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7～8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい

「あとほかに不明な点はあるか？」

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらひ」

そういうとレイジは席を立ち帰ろうとする男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

と一カツと笑う男に対しても自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

とこいつとレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家（？）に帰ってきたレイジはすぐさまマジのショミーレーターを使い必死に訓練していた

（やはりこの体が本能的に覚えてているらしいな・・・

それにもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こいつの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・）

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に N-I-O-H 左腕武装に W-L-O-2-R - S-P-E-C-T-E-R というなんとも微妙なアセンである

（昔の俺は何をしたかったのだろうな・・・）

と内心ため息をつきながらもしつかりとショミーレーターで訓練をしついでいるのであった

あれから数日がすぎ依頼当日
(これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・)

レイジはもう一度依頼内容をしつかり確認して心を落ち着かせようとしていた

(もうすぐ時間だな・・・)

と思つと「クピットの通信からあの男の声がした

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブーストをふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなつていて

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなのじや最強の兵器を作つたつて宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もつといい素材を渡してほしいもんだ」と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中のグレネードを打ち次々に建物の主要施設であろう場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したころにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWLO2R-SPECTERをMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まで扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあつた

（後はこいつを破壊すれば終わりか・・・）

と心中で呟き右腕武装のWLOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

（これで終わりか・・・）

そう思うとレイジは壊滅状態になつた工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえつてその中には必死に助けてや死にたくないなどと言つものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであつたそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた（俺が殺した・・・この手で俺が）

そう思つていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かつて銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があつた

レイジはとっさに殺されると想い左腕武装のWLO2R-SPECTERでひたすらに相手を撃つた

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」

そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにしていったそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残つておりあの地獄絵図を思い出してしまい急に胃の中のものがこみ上げてきて嘔吐してしまった（これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・

“死”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった

第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいますがお許しを
そういう主人公設定など書いたほうがいいですかね？

第2話（前書き）

頑張つて投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文…

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（汗）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突つ込まないでください（汗）
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を
出してみましたが…なんというか

第2話

第2話

あの初(?)の依頼から一週間ぐらいた頃に携帯端末が鳴り響いた

(また、依頼か)

そう思(う)とレイジは携帯端末を手に取った

「依頼か?」

「ああ、なんと今回は僚機をやとつたぞ」

「僚機?」

「ああ『伝説のレイヴンだそ(う)だ』

(伝説のレイヴン?まさかL'Rの主人公か?)

「わかつた、依頼内容の受け取りはいつもの場所か?」

「いやすまんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらにメールとして送らせてもらつ」

「そうか、珍しいなんかあつたのか?」

「いや、いろんな依頼を整理していくな(う)と忙しいだけだ」

「ならいい、無理はするなよ」

「・・・」

「ん?ど(う)じた」

「・・・つああ、お前さん(う)珍しいなと思つてな、いつもは心配すらしないのに」

「なに、ただの気まぐれさ」

「では後ほど依頼内容を送(は)せ(ま)す」

「ああ、頼んだ」

そうこうとレイジは携帯端末の通信を切つた

依頼主の男 side

「ああ、頼んだ」

ところが言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は
「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末からピピピピピと鳴るトレイジは端末を手に取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

（スウェーデンというと北欧のあたりか？）

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見てみる

（なるほどビデオや情報を見る限りLRの主人公みたいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行って合流するとして）

そう思つとトレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた
そして自分の僚機になる者に合流をしにいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかつたとしても顔を知つておぐぐらいはしようと思つたのだ、そして俺がそこの喫茶店の奥のほうに座つて待つて待つていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座つている奥のテーブルの前に行くとこちらがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

(この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか?)

そつ思つていると青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな?」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそつなく返されたレイジは内心焦つたのだ

(まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな?)

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまつたかな?)

とレイジが焦つているとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒つているような印象を持たせるとよく言われていたの思い出し（いつも悪い癖が出てしまったか・・・）

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを持てに触れてほしくないよな気に障つたようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは

「いや、そのことは気にしていない
こちらこそなんか怒つていてるみたいな印象を与えてしまったようだすまない」

とあわてて返してきたのだ。そして一人は互いのその光景に面をくらい思わず笑つてしまつた

「おつとすまないそういうえば俺の自己紹介をしていなかつたな、依頼内容のところで知つてると思つが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイブンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会つてから一日後、作戦開口

「こちらレイジ作戦開始時間となつた、戦闘を開始する」
「こちらレイヴン、了解したこちらも始める」

そう通信するとレイジはブースターで移動を始めた

(一回田の戦闘だって言つのに前回より心が断然なれてるな、一回

でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな)

と思つていろと田的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かつて背中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思った瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思いあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

(なっ！まさかネクストだと！？どうしてこんなところに…？)

と思つていると通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまんな、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち田はまったく無いと思つてお前らの情報を売つて安全を保障することにしてもらつたんだ」

彼は淡淡と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになつてはいるからな、まあ運が悪かったと思つてあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言つと通信は切れて田の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だったなあ、時代遅れの鴉どもめ。このヒーローの俺が葬つてやるよ喜べ！」

ハハハと気がふれてるように笑つて言つた

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送つた

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあ

卷之三

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」

それは勿論か。されど、さういふ人が

「井に分かれて逃げよう、近くに洞窟があるぞ」の付近でACを

いくらネクストでもそニ

能だ、一緒に逃げてもまとめて殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け

「三体いるだろ！」

「まかせろレイヴンが逃げる時間、ぐらい稼げるや、俺のほうがお前

よりネクストのことを知っている「

「でもレイウンは一回だけが生き残る」ことを選択しようとしないでいたするとレイジは

いいから早く行け！！お前はこんなところで無様に死ぬのか！？違うだろ？お前は誇り高きレイヴンだろ！なら生きてレイヴンは誇れる子王だ、俺たちの王めども生きてくれー！！

それを聞くとレイヴンは

「すまない」

とつぶやきオーバードブーストをふかし去つていいくのを見て

敵ネクスト、赤色のアリーヤのパイロットは

おい、なほ遙に、おおとじてんが、

打ち込まれた

「ああ！？ てめえなにしやがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした
「ふつ、Hリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言つと

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ肩が…おイベルリーズ、アンジヒてめえらはこいつとわいを逃げた奴には手を出すなよ！俺が始末してやる！」

と言つと一人からは「好きにしろ」との言葉が返ってきた

（これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？）

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！」

その言葉と同時にO4-MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃げた

「おい…さつきの威勢はどうした？ 逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対しレイジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとほくだらないな、レーザーソードでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言つたことを後悔するなよ？ お前のACの四肢を切つて最後にじつくりコアを焼ききつてやるよ…！」

そういうと彼は右手からO4-MARVEをすべて左手のO2-D RAGONS LAYERだけとなつた

（下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？ それともAMS適正で頭のネジが吹っ飛んだか？ どちらにしてもこちらにチャンスはできたわけだ）

そう思つてレイジは右背のグレネードをページして相手の目の前に
でた

「やつと観念したか肩野郎めが」と

そういうこちらに向かつて突つ込んでくる赤いアリーヤそれに向かい左背のグレネードを下半身に撃ち込むするとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにP.A.などがあつても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージ
してOBをふかし相手に向かつて突つ込む
オーバードースト

だが02-DRAGONSAYERが直撃することは無かつた、なぜならば02-DRAGONSAYERはほかのレーザーブレードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握できていない三流リンクスが振るつたところで一撃必殺にはならなかつた。だがレイジの乗るACの頭部に掠つてしまい頭部が吹き飛んだがレイジはとまらずに

と叫び相手のアリー・ヤのニアに右腕部のNIOHを撃ち込むと

「があああああアアああアあああ！」

と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しんでいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにZIOTHを3回撃ち込むと赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

（「れでもう戦うための武装は無いな、だがレイヴンが逃げる」と

ができるぐらいの時間は稼げただろう（ひつ）

そう思つとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももつレイヴンの時間稼ぎをまだ行うかのよつに立つていた

それをみたベルリオーズは

「なるほど、そんなになつてまで仲間を助けよつとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな

なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いや、死ぬのは怖いと、そしてなんもなく無意味に死んでいく

のはもつと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていのいのとあまり変わらないと俺は思つてゐる」

と今にも氣を失いそうな自分の体に鞭を打ちそつこたえた。すると

アンジエが

「ならばなぜ今このときも逃げよつとしない？充分にあのACが逃げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと思つただけさ」

その後にまあ生きることが勝利なら俺はもつ負け確定だけなと加えて言つた

それを聞いたベルリオーズは

「ほつ、いい戦士だ。お前にもつ一度チャンスをやろつ」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからず自分意識を手放したのであつた

第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジェ、4の主人公はこんななんじゃねえ！と思われるかも知れませんがそこら辺はついついまないでくれるとあります（・・・）

そして次も頑張りたいと思います

第3話（前書き）

え～前回の話でネクストに勝つてますがやじら辻は「都合主義」という形で保管してもらいたいといふ（汗）

そして今回も微妙なできですが是非読んでください

「知らない天井だ・・・」

と言ふと最初に目に入ったのは白い天井である

（俺はあの後、死んだのか？）

そう思つていると病院で嗅ぐ様な薬品の臭いが鼻を通りてきて、ぼやけた意識を覚醒させていく

（ここは天国じゃないと病院か？）

そう考へると体を起こし周りをみると自分の体に点滴やら医療用のチューブなどが繋がつているのを見る
(まさか気を失っている間に“ナニカサレタヨウダ”つてことになつたのか!?)

などと考へていると見知らぬ男が入ってきた

「どうやらやつと田が覚めたらしいな」

と聞き覚えのある声

「あなたはまさかあの新型ACに乗っていた人か？」
(もし、そなへにいつの名は

「そうだ、私の名は

“ベルリオーズ”

だ。おぼえておいてくれ

「ああ、それよりどうして俺は助けられたんだ？」

「ふむ、興味がわいたと言つたほうがいいのか？」

「興味がわいただけで助けるのか？まあ、助けてくれたことには感謝する。それとあのとき最後になんか言つてたがどういう意味だ？」

「言葉のとおりだ。お前にもう一度チャンスをやる、自分が生きた証を立てることができる、すなわち、もう一度戦場に立つチャンスをやると言つたんだ。」

「あんたはなぜそこまでしてくれるんだ？それこそあんたが言つていたように他人からみて無意味な行為など言われんじやないのか？」「そうかもしかんな。まあ個人的にだが、よい戦士だと思ってな、見てみたくなったのさ」

なにをとは言わなかつたがそれはレイジもなんとなく“それ”を理解したのだ

「そうか、そういうえば外の状況はどうなつているんだ？」

「ああ、それな」「それならすでに企業側が圧倒的な勝利を収めて終わつた」

とベルリオーズの言葉を扉から入つてきた女性がさえぎり、口にした。するとレイジは

「あの後、たつた一日でか！？」

（いくらネクストが圧倒的に優れているといえ一日ですべてを潰したのか！？）

と驚愕の表情をし聞いてくると

「一日？なにを言つてるんだ？すでに一週間と数日はたつているぞ。」

と呆れたように答える女性

「俺は一週間以上も眠つてたのか！？」

とまたも驚愕の表情で聞いてくるレイジ。それを聞くと女性は

「まつたくいちいちうるさい奴だ、いいかよく聞け、お前は私たちと戦つた後なぜか知らんがそこにいるベルリオーズに助けてもらいこの療養施設に運ばれて、お前が眠つている間に企業側が圧倒的な勝利を收めて戦争は終わつた。そして今日お前が目を覚ましたというわけだ。まつたくなんでこんな奴を助けたんだ・・・」

と呆れたように肩をすくめて言つ女性の言葉に対してベルリオーズは

「よい戦士だと思もつてな、興味がわいたんだ。そういう君もまつ

たく興味がないわけではないだろう?」

そう言わると女性は「ふん」と言いそっぽを向いてしまった

「やういえは彼女の名を言つてなかつたな、彼女は「アンジェ」だ」。

・・それとまだ、お前の名前を聞いていなかつたな

「ああ、言つたのを忘れていてすまない、俺の名はレイジだ。もう一度言わせて貰うが助けてくれたこと、感謝する」

度言つとレイジは軽く頭を下げた

「なに、あまり気にするな。そしてさつきお前にチャンスをやると

言つたことについてだが、AMSを移植してもらひがいいな?」

と聞くとレイジは

「どのみちそつでもしなきやこの先、戦場では生きていけないんだ
るうつ。移植するなら今からでも俺はかまわん」

と笑つて返した

「理解が早くて助かる。ならば私についてくれ

と言つとベルリオーズが部屋を出て行き、レイジはそのあとについていった

あれから俺はAMS移植手術をして数ヶ月後、はれてリンクスとなつていた

そしてレイジは助けてもらつた恩を返すために2年程レイレナード社のリンクスとして動くことになった

因みにレイジのAMS適正は下の上、良く言えば中の下といつ微妙なものである

(どうやら神様は俺に厳しいらしいな・・・ん?でも確か、AC4の主人公のAMS適正は最悪だったよな、ならうじうじ文句は言つてられないか)

と思い、今日もまたショミリーテーでネクストを動かし、少し休憩していると

「ほり、少しはましんな動きになつてきているじゃないか」

とアンジエが言つてきたのだ

「ほほ毎日乗つてゐんだ少しぐらこましにならなかつたら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな と自嘲氣味に返した

「確かに、どうだ私と戦つてみないか?」

「そうだな、よろしく頼むよ」

そう言い再びショミリーテーに乗り込んだ

アンジエ side

彼女は今日、珍しく、数ヶ月前に新しくリンクスになつたレイジのショミリーテーの成績を見ている

正直、彼は彼女が思つてゐるよりも成長の度合いが早かつた。

（あいつのAMS適正は下の上であり低いほつだつたな、なのにこれがだけの成長速度・・・いや、むしろ速すぎるぐらいか）

と思つてゐるとレイジがショミリーテーからでてきて近くのいすに座つた

（ふむ、試してみるか・・・）

そう思い、彼が座つてゐるほづに歩いていき

「ほり、少しはましんな動きになつてきてるじゃないか」

と言つとレイジは

「ほほ毎日乗つてゐんだ少しぐらこましにならなかつたら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな と付け加えて自嘲氣味に返してきた

「確かに、どうだ私と戦つてみないか?」

と彼女はシコミリーダーに腰をさしながらレイジに言った

「そうだな、よろしく頼むよ」

と言い彼は再びシコミリーダーのほうに歩き出し乗り込んだ。それを見て彼女は

（ふつ、これまでの力、試せらる手もひづく）

と思いつつ、彼のシコミリーダーのほうに歩き始めた

side out

シコミリーダー内の仮想空間の戦場

そこにはアンジェが乗るネクスト・オルレアとレイジが乗るネクスト・アノーニモがいる

オレリアの武装は左腕武装に01 - HITMAN 右背武装にSUBLTAN 肩に09 - FLICKER そしてなによりも彼女の代名詞と言つていいほど特徴のある右腕武装“07 - MOONLIGHT”である彼女の振るう劍は誰よりも美しく、勇ましいものであり剣姫と言つねがふさわしく思えるものである

それに対してもアノーニモの武装は右腕武装に03 - MOTORCO BRA 左腕武装に04 - MARVE 左背武装にTRESOR とこうなんとも特徴の無いアセンになっている

そして一人の「クピット」に開始の合図ができる

すると先に仕掛けたのはアンジェの乗るオルレアである

真っ先に肩の09 - FLICKERを撃つと同時に07 - MOONLIGHTで切りかかってくる

レイジはとつさに左にQBでよけるが07 - MOONLIGHTが少しがすりPAを^{バイブルーム}ごつごつと削られる

そしてレイジはすかわざQBを使い多少距離をとるとQTで体勢を^{クイックターン}

立て直し左手の04 - MARVEをまだこちらに向かわつていないとアンジエに対して（もひつた！）そう思い撃つ

しかしその行動を予めよんでいたかのよにQBで難なく避けたのだがレイジもすぐさまにQBを使い、アンジエに張り付くように移動し、右手の03 - MOTOR COBRAと左手の04 - MARVEを撃つ

それに対してもアンジエも左手の01 - HITMANで撃ち返しながら右手の07 - MOONLIGHTで切り裂こうとどんどんと近づいてくる

レイジも相手の必殺の間合いで入らぬようにQBを使い均衡を保つていた

しかしそうさまその均衡をやぶったのはアンジエであった、アンジエはレイジの一瞬の隙をみて一段QBで一気に詰め寄り右手の07 - MOONLIGHTを振るつた・・・が完全には切り裂いていかつたレイジの突発的な一連QBでなんとか致命傷を避けたのだが（ほつ、今のは完全に決まつたとおもつたんだがな、にしてもなかなか当てるじやないか。なら次は強引にいかせてもらおう！）そう思いながらアンジエは攻撃の手を休めずにいた。^{アーマーポイント}そしてレイジは（危なかつた、何とか致命傷にはならなかつたがAPとPAを）つそり持つてかれたな、にしてもさつきから攻撃がどんどん鋭くなっているな・・・しかたないこは賭けに出るか）

と考え左手の武器を背中のTRESORに切り替えアンジエに向かいQBをすると

アンジエは好機と考えレイジに向かい07 - MOONLIGHTで切りかかつた

するとレイジは07 - MOONLIGHTがあたる直前でTRESORを撃つと同時に右にQBをしたが避けきれず07 - MOONLIGHTがほぼ直撃してしまつたのだ、するとアーマーモのAPは0となり「OUSE」と書つ文字がレイジのショミレーターに浮かび上がつた

（やつぱりかー！）
と思いつレイジはシユミーノーターをでた

アンジュー side

（最後のあいつの一発もし直撃していたら私は負けていたかもな。
強いな・・・この先が楽しみだ）
と心の中で言つと彼女は自分でも気づかぬうちに笑っていた
(やはりベルリオーズの見込んだとおりかもな、よに戦士になりそ
うだ)
そう思つシユミーノーターからでた

side out

アンジューがシユミーノーターからでるとレイジは
「やつぱりアンジューは強いな、勝てんな」
「ふつ、お前も予想より強くなつたじやないか」
と珍しくレイジのことを褒めたのだ
「やうか、ありがとう。だが次は勝てるよつになつてやるわ」
「よく言つ、簡単には勝たせやしないさ」
そつ言つとアンジューはシユミーノータールームを去つていく
そして扉をでると
「君が褒めるなんて珍しいな。いいことでもあつたのか？」
と聞くベルリオーズに対し
「やうか？まあ、あいつはお前の言つたとおり、よこ戦士になるか
もな」

そう言つと彼女は廊下を歩いていった
するとベルリオーズは彼女の言葉に對して「ほつ」と書いたシユリ
レータールームに入つていった

そしてこのあとレイジはリンクスN.O.・29をもりこ
ショミレーターでベルリオーズにぼくぼくにされるのであった

第3話（後書き）

相変わらずベルリオーズやアンジーは「なんじゃねえ!」と思われますよね・・・。

あとリンクスN.O.29ですが実際はAC4開始前に倒されているらしいんですがそこら辺は少し独自設定的なものを入れさせてもらいました

次も頑張って書きたいと思います

早く時間を進めたい・・・

第4話（記憶せん）

えへ、今回も無駄に長いし駄文です
いろいろとキャラが安定してなく読みづらっこますが、すみません（汗）

そして、もう田代になにやら…と思われる方もいらっしゃると思う
ますが
ISの世界に転生するのねもう少し先になります
一応今週中にはISの世界にいくつもつでおつまみのドリンクが温かい皿で見守つてください（――・）

レイジ side

「リンクス、お疲れ様です。そちらに輸送用のトレーラーを回しますので、それに乗り帰還してください」

と言いオペレーターからの通信が切れるとPAをきり、肩の力を抜くと今までのことを少し思い出していた

昔は戦場なんてものはアニメや漫画、ゲームでしかりえないと思っていたのに自分が今この場にいること馴染んできているのが非常に不思議に感じる。今でも夢を見ているんじゃないかと思うぐらいいだ、最初のミッションでの地獄絵図を見たときガタガタ震えて嘔吐をしてしまっていたのに今ではその地獄絵図の状態で敵の兵士などが命乞いをしても躊躇わざに引き金を引けるほどまでに自身の心は変わってしまつているとすると複雑な気持ちになる。

アニメや漫画、ゲームの戦争の殆どは主人公達がいてその主人公達と敵対するものがほぼ必ずと言つていいほど世界を混乱に陥れるためにだの言い主人公達のほうに必ず大義名分があるようになつており、しかも事情があつたり、悪に利用されて戦つている人達や事情を知つた主人公達はその人達を殺さないで事情を解決したり悪を倒してハッピーエンドとなるようになつている。

だが実際の戦場と言つものはそんなものではない。戦つものにはそれぞの思惑があり片方が絶対的な悪というのは存在しないのである

る。誰かが正義と思つてゐることは他の誰かからみれば悪になるかもしれないのだ。そして戦場では一瞬でも引き金を引くことを躊躇えばその先に待つのは“死”というものだ。例え相手が家族を人質にとりられて戦うしかないとしてもだ。そういう悲劇的な相手に対しても命を奪う非常さがなければ生きていくことは難しいのだ。

そう考へてゐる間に遠くに輸送用のトレーラーが見えてきてレイジは考へることをやめて帰還の準備をした。

side out

そしてレイジは輸送用トレーラーで近くのロードーに帰ってきて町を歩いていると大きな荷物を必死に持つてゐる少女がいた、見ていると今にも転びそうでとても危なつかしい様子である。
(ふむ、手伝つてやるべきか? だがいきなり見ず知らずの他人が手助けしようとしても、不審者にしか見られないからなあ)

そう考へてゐると少女がとうとう転んでしまい中にあるものをばら撒けてしまい近くにいた軍隊のような服装をした男達3人ほどの集団に当ててしまったのだ。

すると少女は

「「、「ごめんなさい!」」

と慌てて誤る。しかし男は

「おい、お譲りやんなしてくれてんだ! 靴が汚れちまつたじゃないか、どうしてくれるんだ?」

と因縁をつけてきたのだ。だが少女は必死に謝ることしかできない

「ほ、本当に」「めんなさい！決してわざとじゃないんですよー。」

ともう一度謝るが

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあー。」

と、やたらに怒鳴りつける

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝つただけで許してもらえると思つてんのか？」

と他の男が言いそれに続きわざと男が

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲りやん」

そうは言つても子供が10万などといつ大金を持つてはるはずがなく払えるはずがないのだ。しかし男達は無理に要求してくる

「なあ早く払つてくれよ」

とさりに催促してくる

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持つてないですーー。」

なみだ目になりながらも必死に訴えてる少女。

「へえー

と言つながらその少女をなめまわすように見ると

「じゃあ悪い子にはちょっと、お話しないとね」

と言つと強引に少女の手を引き路地裏の暗いほうへ連れて行つとする。少女は助けを周りに求めるが通行人は見てみぬふりであるまあ軍人みたいな相手だと自分の身がかわいくて誰も助けることはしないだろう

（なんつうか、アニメや漫画でありそうな光景を目の当たりにするとは思わんかつたが、まあ俺も流石に子供を見てみぬふりをするほど腐っちゃいないからな、全く面倒なことになつた・・・）

そう言つと男達がいるほうへ歩いていった

今日は、おつかいに来ました。そして今日のおつかいはいつもより荷物がいっぱいです。だけどほかの子のみんなのためにつきつけんめい運んでいます。するとつまづいてしまい途中で転んでしました、やつぱり一人で来ないでお姉ちゃんに手伝つてもらえばよかつたなと少し後悔しました。

わたしは急いで散らばった荷物を拾おうとしました、すると男の人たちがこちらをにらんでいます。わたしはおそるおそる男の人たちを見ましたすると荷物の中にあつたジャムが男の人たちの中の一番背が高い人の靴にかかってしまつて見ついているのを見てあわてて

「う、ごめんなさい！」

と急いで謝ります、ですが男の人は

「おい、お譲ちゃんにしてくれてんだ！靴が汚れちまつたじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と怒鳴られてしまいました。わたしは必死に謝ります

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！」

ですが男の人は

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

とさらに怒鳴りつけてきます。すると

「俺らはこの町を守つている偉い人たちなんだよ、謝つただけで許してもらえると思ってんのか？」

と一番目に背が高い男の人が言つてきました。どうしよう、偉い人なのにと必死に考えてると

「この靴とか高かつたんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

とさつきの男の人から弁償をしろと言われます。そんなこと言われてもそんな大金は持つていません。ですが男の人は

「なあ早く払つてくれよ」

とさらに言つてきました。ですがわたしは孤児でたとえ孤児院に帰つてもうつてくることなんてできません

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持つてないです……」
と、わたしは泣きそうになるのを必死にこらえ言いましたすると男の人は

「へえー」

と言つと私のことを気持ち悪い目でじつと見てきます。すると
「じゃあ悪い子にはちょっと、お話しないとね」

と言つとわたしの腕をつかみどこかに連れて行こうとしてきます。
わたしは必死に抵抗しましたが大人の力には勝てず、どんどん引き
ずられていきます。わたしは必死に周りの人に助けを求めるますが周
りの人たちはみんなこちらをチラッとみるとすぐにどこかに行つて
しまいます。わたしを助けてくれる人が誰もいないのだと、そう思
うと今まで抵抗してた自分の力がゆるみもう駄目だなと思つと

「おい、下衆どもその手をさつさと放してとつとと消えうせろ」
と黒い髪に黒いコートを羽織つた男の人が言いました。するとわた
しをつかんでいた男の人が

「なんだ、てめえ？お前は関係ないだろすつこんでろ！」

と怒鳴りました。すると黒い男の人は

「さつきの会話からするにたかが10万払えばいいのだろう？」
と言つと財布のなかからお金をわたしをつかんでいる男の人にむか
つて放り投げました。すると

「さつき払えなかつたから利子がついて合計100万払えば許して
やるよ！なんせ俺は偉いからなあ！」

と笑いながら無茶な要求をしてきました。すると黒い男の人が
「どうか、貴様は自分が偉いとか思つてるのか？やれやれ、どうと
う脳みそでもカビたか・・・」

と言つとわたしをつかんでいた男の人が急に黒い人に向かつて殴り
かかりました。わたしは思わず目をつぶつてしまい。鈍い音がして、
おそるおそる目を開けると殴りかかった男の人がおなかの辺りを必
死に押さえてうずくまっています。すると一番目に背の高い人が

「おい、てめえこの人はリンクスだぞ！ てえだしてただですむと思つてんのか？」

わたしは、それを聞いて、とてもあせりました。リンクスという人は戦場で戦うとても強い人だと聞いたことがあります。そんな人に手を出して大丈夫なんでしょうか・・・

「ほう、そいつはリンクスか、笑わせる。俺もリンクスだがそいつのような奴は見たことが無いんだがな、因みに俺のリンクスN。は29なんだがな」

そう言うと一番目に背の高い人は顔を真っ青にして

「ほ、本物のリンクス」

と言つとうずくまつてゐる男の人ともう一人の男の人と一緒に急いで遠くに行つてしましました。そして黒い人はこちらのほうを向くと近づいてきました。そして黒い人はわたしの頭に手をのせると

「大丈夫か？ よく我慢したな」

と言いました。するとわたしは急に涙がでてきて泣いてしまいました。すると黒い人は抱きつき声を上げて泣いてしまいました。すると黒い人は「もう怖くないから安心しろ」

と言いわたしをそつと抱きしめてくれました。黒い人は外見は真っ黒だけど絵本に出てくるような白馬の王子様のようにみえました。

side out

あのあと少女は多少落ち着いたらしく泣き止んだ

「どうだ？ もう大丈夫か？」

「は、はい。その、さつきは助けてありがとうございます！」

「なに、気にするな。やつこやお譲ちゃん、買い物をしてたみたい
だが大丈夫か？」

「あー、どうしよう……」と言つと少女は俯き肩を沈める
「ふむ、買つものはまだ憶えてるか？」

突然の発言に少女はビックリし

「ふえつ？」と素つ頓狂な声を発してしまつた。そして
「はい、一応憶えています……」そう答えると
「そうか、これも何かの縁だしな。俺が代わりに買つてやるよ
「で、でも助けてもらつたうえにそこまでしてもらひのせ……」
と、ためらう少女

「だけどまた親御さんにお金をもらつていくのも大変じゃないか?
「あ、えつと、その、わたし孤児院に住んでいて、親がいないんで
す……」

と少女はだんだんと声を小さくしながら言つのを聞くと
(やつてしました……あまりにもデリカシーの無いことをしてしま
つた……)

そう思い、レイジはどうかしよつと考へ

「じゃあ、俺が君の住んでいる孤児院にお金を寄付するとこう」と
でいいね」と言つが

「で、でもそれは、」とまだ言おうとするのに對して少女の頬を軽
く引つ張り言葉をさえぎると

「まあ、いきなりあつた見ず知らずの人を信用しろと言つのなんだ
が、もうちょっと年上の人を頼つていいんじやないか？」

と優しく語り掛けると少女は小さく「くん」と頷くとレイジは頬
から手を放し

「やはり、子供は素直が一番だ」と言つて笑つた。すると少女は手に
軽く力をいれ

「あ、あのーわたしは、リ、リリーウムとこますーお、お兄さんの
名前を教えてください！」と力強く聞いてきた

「そういや、言つてなかつたな。俺はレイジ・クゼだ、よろしくな

やつぱりと腰を立ちリコウムとこう少女と買に物をしにでかけた

そして買い物の途中

「やういえば、レイジさん、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、全然問題ないな。リンクスは高給取りだからな」

「リンクスですか、その、怖くないんですか？戦うことだが・・・」

「怖いといえは怖いかな・・・けど、もう慣れてきましたかな？それに、もうこれしか生き方が無いからな」

「で、でも他のお仕事だつて頑張ればみつけられるんじや」

「まあ、できないことも無いだろうが、戦うことしかしてきてないからな、他の仕事につくのは難しいだろくな」

（レイジさん、なんかとても寂しそうな顔をしつる）リコウムが思つてゐる

「せひ、じんなくらい話はやめよつ・子供には関係ない話だ。」

と言つてリコウムの頭をわしゃわしゃとなで「ふむ、綺麗な髪の毛じてゐな」と言つて

「孤児院のお姉ちゃんがいつも一瞬とかしたつしてくられるんです！」と嬉しげに話す。するとリコウムはふと足を止めとある商品棚に置いてある百合の花の髪留めを見ていた。それを見てレイジは「どうした、それが欲しいのか？」と聞くと

「い、いや、とても、綺麗だなと思つて」

「ん？欲しくないのか？」

「そ、それは・・・ほ、欲しいですナビ・・・」「ううんよ」と

答えるリコウム

「よし、俺からのプレゼントだ、買つてやる」

「い、いえ大丈夫です・そこまでしてもいいのは」とにかくいつもや

はり欲しそうに少し目を輝かせてくる

「遠慮するな、リコウムも女の子だ小さこりから髪留めの一つ

一つみにつけないと将来もてないぞ」

といい髪留めを買つてリコウムに渡すと、とても満面の笑みだった。

そして残りの買い物も無事に終わリリウムを孤児院に送つていく
と去り際に「縁があつたらまた会おう」と言いレイジも帰ることに
した

そしてそれから数ヶ月後レイレナード社にレイジは来ていた
(ベルリオーズに呼ばれたが、どうしたんだ? 一年間だけといった
がそのあとも一応、レイレナードのリンクスとしているからな・・・
)

と考えているとレイジが待つていた部屋の扉が開きベルリオーズが
入ってきた、すると・・・

「世界を私たちとともに変えないか?」

第4話（後書き）

今回もびみょうでした・・・

そして次から一気に時間を進めていきどうにか今週中にはE-Sの世界にいけるよう努力いたしますのでよろしくお願ひしますm(_-)

第5話（前書き）

え、いつの間にか5000円と1000ユニークを超えてました！

皆さん読んでいただき、本当にありがとうございます！

評価してくださつたり感想を書いていただいた方にとっても感謝感激です。

自分は小説を初めて書く身なのでとても嬉しいです。

今回の話で時間をかなり進めました。

なので予定通り今週中にはE-Sの世界に入ることができるのです。

そして後書きのほうにアンケートみたいなものをしておりますので是非ご協力をお願いします。

第5話

約三ヶ月前、GAにコロニー・アナトリアから傭兵が売り込まれた。そう、リンクス戦争へのカウントダウンの始まりだ。

アナトリアの傭兵は次々と戦火をあげ、さらに、マグリブ解放戦線の出来事により瞬く間にその存在が知れ渡つたのだ。

そして約一週間前に、GAグループ内である事件が発生することになる。GAEが秘密裏にアクアビットと提携しGAグループを離脱するという事件だ。そして、そのことがわかつたGAグループはGAEに対し、アナトリアの傭兵に肅清の意味を込めて“ハイダ工廠”で開発中の巨大兵器諸どもの破壊を要請したのだ。このことにより今まで水面下で対立していた企業間の争いが表面上に浮き出てきたのだ。

そして先ほど

「世界を私たちとともに変えないか？」

とのベルリオーズからの突然の申し出にレイジは驚きを隠せないでいた。

「なぜ・・・俺なんだ？」

「あれから、お前を見てきたが、私の予想通り、いやそれ以上によい戦士になっている。だからお前の力を借りたいと思つたのだ。」

そう言うベルリオーズに対してレイジは

「それは買いかぶりすぎだ、ベルリオーズ、俺なんかよりいい戦士は他にいるだろう。俺はあなたの言うような、よい戦士でもなんでもないただのリンクスさ、だからせつかくのお誘い悪いが、断らせ

「…すまない。」

レイジは處を噛み本当に申し訳なさそうにベルリオースに告げる。

「そ、う、か、つ、ま、り、な、

「やうが、やうりな お前ならそれを聞いてたそ」と、
語うベルリオーズの言葉を聞き

「なつ、あんたは俺が断る」とわざと

「まあな、だが本物にお前の！」と云ふ戦士だと思つてゐるぞ。まあ

あ、迷夢が変わることがあれは和に連絡してくれ

「……………」
「……………」

「俺がしつかりとみどりさんをさる」

ベルリオーズ Side

やはりレイジは、自身の「」とを過小評価しそうだな、己を過小評価しそうだと自滅してしまつからな。だが私の思った通りだな。まあ、あいつが加わらないことは残念に思えるが。たとえあいつがいなくとも私たちが世界を変えてみせる。

ふつ、それにしても私の“答え”を見廻せるか、やはりよい戦士だ。

side out

そしてリンクス戦争は、次第に拡大していった。そして数カ月後、レイレナード本社はアナトリアの傭兵により壊滅し、アクアビット社はジョシュア・オブライエンの襲撃により壊滅。こうして主戦力たる二社が壊滅に陥りインテリオルグループは停戦を提議し、リンクス戦争は終結した。

クス戦争は幕を閉じたのだった。しかしこの戦争により企業はかつてないほどに消耗し、無秩序に地上の「ジマ汚染はいつに拡大し、多くのコロニーが消滅した。

それにより、人々は汚染された地上を捨て、人類の過半数は清浄な空でクレイドルと呼ばれる巨大プラットホームで生活をするようになった。

一方で国家解体戦争で企業が支配体制を確立した原動力アーマド・コア“ネクスト”と、その搭乗者“リンクス”その圧倒的な力の個体依存性に危機感を抱いた企業により、企業機構“カラード”管下の傭兵として地上に残されることとなる。

今や、企業軍の主力はアームズ・フォートであり、かつて戦場を支配したネクストたちは、この薄汚れた地上で延々と続けられる経済戦争の尖兵と成り果てていたのだ。

そして、リンクス戦争が終結してから約二年後
あの後レイレナードの多くの者達がオーメルサイエンス社に取り込まれていき、レイジもその中の一人であった・・・

「リンクス、実験を開始します」と通信がはいり
「了解」そう短く応えるとレイジは、VOB^{ヴァンガード・オーバード・ブースト}がネクストにちゃんと接続されているかを確認し〇Bのスイッチを入れると次第に加速していきある程度加速するとVOBが点火しつきに超加速をする。

レイジは、超加速によるGに耐えながらVOBの数値を確認していく、すると突然コクピットから警告音が鳴り響く。それはVOBに異常が発生しているという警告音だった。
(やはりな・・・)

とレイジは冷静に思う。それもそのはずだ。

レイジはもとはレイレナードの出身、リンクス戦争に敗退しオーメルに取り込まれたのはいいが、オーメルからみれば自分達がレイナードを潰したようなものだ、もしかしたら復讐されるかもしれない。だがレイジは今までオーメルの新兵器の実験などになんもなく普通に受けていた。そう、別にレイジは復讐しようだのなんだとは全く思っていないく、ただ実験の依頼が来たからそれをこなすとうにしか考えていないかった。だが逆に、なにもしなさすぎたのがオーメルから見れば不安だったのだ、以前はベルリオーズなどと一緒にいることが多かったので、実は何か企んでるのではないか、事故を装いレイジを抹殺することに決めたのだ。

（俺は、こんなところで死ぬのか。今までの行いからみれば、まあ、当然か・・・）

と頭で自身の死を思つていても本能は生きようと必死にVOBのパージをしようとしている。考えていることとは全く別の行動をとる体に対しても思わず笑つてしまう。

（ふつ、そつだつたな・・・俺はどんなに醜くても生きよつとする奴だつたな。なら足搔いてみるか）

そう思いどうにかVOBをはずそうと必死に操作する。やつとの思いでVOBをはずすことに成功したがその直後、VOBが爆発を起こしその爆発に巻き込まれる。するとレイジの乗るネクストはボロボロになり落下する。そして中のレイジも爆発の衝撃が凄まじくそのダメージを受けていた

「がはつ！ ははつ、やつぱりこいつなる運命なのかね・・・まつたく、ついて、ない、な・・・」

吐血し、そう言つとレイジは意識を手放した

とある扇動家 side

私は今日、とある企業の実験場に来ている。

（やはりな、彼のことを事故を装い抹殺しにかかつたか。ふむ、企業としては正しい判断だな。企業の人間の9割は彼が死んだと思っているだろう。だが彼はおそらく生きているだろう。まあ、こちらには都合がいい。さて、その人がよい戦士と認めた人物だ、接触をしてみるか・・・）

そう思つと、とある扇動家は移動し始めた・・・

side out

レイジはふと目が覚めると目に映るのは白い天井である

「知らない天井だ・・・」

（あれ？なんかこんな状況前にも経験が・・・）

そう思つているとドアが開き、そちらのほうに顔を向けると一人の青年が立っていた

「どうやら田が覚めたみたいだな」

「お前が助けたのか？」

（どつかで見たことある顔だな？どこだつたかな・・・そしてどことなく雰囲気があいつににているしな、こいつもしかして・・・）

「ああ、そのとおりだ。まず名前を伺つてもいいか？」

「名はレイジだ、お前の名は？」

「私の名は“マクシミリアン・テルミドール”だ」

「お前、もしかして昔、何回かベルリオーズと一緒にいたことがある奴だろ?」

「なんだ知っていたのか」

(やはりな、レイレナード時代にたまにベルリオーズと一緒にいるところを見たことがあるしな)

「いや、思い出しだけだ。で、わざわざ助けたからには何か用があるんだろう?」

「まあ、用はあるが、まず先に話をしてみたくてな」

「話?俺なんかにか?」

「ああ、あの人人が高く評価していたから気になつてな」「あいつは俺のことを高く評価していたが、実際そんなたいそうな人間じやないわ」

(ふむ、聞いたとおり自身のことを過小評価しすぎているな)

「まあ、絶対にありえないが、俺が加わつて戦況が変化するほどものだつたら、俺は、あいつの誘いを断り、見殺しをしたようなもんなんだぞ?」

「戦況が変わるかはわからないとして、見殺しにたと言つのは少し違つではないか?あの人から聞いたぞ、あなたが断つたのを聞いて部屋をでたあと“答え”を見届けると言つてたらしいじゃないか。確かに他の人間からすれば見殺しにしたのと同じになるだろうだが少なくとも私は、そうは思わない」

レイジは今回の実験も自分が事故に装い殺されるであつたと、わかつていてもそれは自身の贖罪だと思い受け入れようとしていた。もしあのときベルリオーズの手をとつていたら、ベルリオーズやアンジエ、友と呼べる者が死なずに違う未来が訪れたかもしれない。だが自身はそれを拒んでしまつた。そして友と呼べる者達が死に、気づいたときには遅かつた。“答え”を見届けると言つても他人から見ればしょせんは自己満足からでた言葉なのである。だが目の前の

男はそのことも理解したうえでレイジの行動を否定せずにいてくれた。もしかしたら利用するために言つてるのかもしれない。だが、そのことがレイジにとつてどこか救われるような気がしたのであつた。するとレイジは「ありがとう」と静かに呟いた

「感謝される憶えはないんだがな、受け取つておこづ。」

（ベルリオーズ、やはり彼は、あなたの見込んだとおりかもしれない）

「ふむ、話はこれぐらいにして。本題に入つていいか？」

「ああ、かまわない」

「まず私たちがやろうとしていることはクレイドルの前提を覆す明確な反逆行為だそれを理解したうえで聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にしかすぎない、このままで人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ。

それをよしとしないのであれば、是非、私たちと共に世界を変えないか？」

「ふつ、いいだろう。こんな奴でよければ、仲間になる。」

そういう不適に笑つてみせる

「じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？」

「そのことだが、もう一度、カラードに特定の企業に深く関わらないリンクス、つまり独立傭兵として加わり行動してもらつがいいか？」

「かまわないが、大丈夫なのか？俺は一度、殺されそうになつた人間だぞ？そんなやつがまた表舞台にたつたら面倒なことになるんじ

やないか？」

「大丈夫だ。そのことも折り込み済みで君にはもう一度、表舞台に立つてもいい。まあ、死んだことになつてるから名前などは変えてもらひになるとなるがな」

「わかつた」

「では、新たな名前を決めてくれ。そつすれば私のほうで手をまわしておこう」

（名前か・・・ふむ、少し皮肉をいれてみようか、ならば・・・）
「きめたぞ、新たな名は“ジョン・ドウ”だネクストのほうは“ネームレス・ワン”で頼む」

「“ジョン・ドウ”と“ネームレス・ワン”か・・・ふつ、ずいぶんと意味ありげな名前だな」

「そうだろう？では、これから俺のことはジョン・ドウ、略してジヤックとよんでくれ」

「そつか、よろしく頼む。ジヤック」

そして、この日からレイジは新たな名、ジョン・ドウとなりORC A旅団に加わったのだ

第5話（後書き）

一応、この後は首輪付きは首輪付きで出します

そしてアンケートみたいなものですが、ISの世界に転生させる人で主人公とリリウムを入れる予定でいます

その他に首輪付きも入れようかと思っているんですが

入れてもありじゃないか？と思われる方は 1 で

首輪付きを入れるなんて絶対に許さない！みたいな方は 2 で

感想の一言のほうにお願いします。

締め切りは一応土曜の昼の12時までとしますのでご協力お願いします。m(ーー;)m

第6話（前書き）

アンケートにご協力の方本当にありがとうございます。
アンケートのほうは、明日の暁の12時までとなつておつますので
ぜひ他の方もご協力おねがいします。

そして今回も時間をそれなりにすすめた感じがします。
なので結構無理やりな点がいくつあると思いますがそこは見てみ
ぬふりでお願いします（汗

レイジがジョン・ドゥと名乗りORCAに入つてから約2年がたつ

新人リンクス side

俺は今、企業連からのラインアーチ襲撃の依頼を受けた。

力をちらつかせた交渉は、我々の本意ではない、ねえうん、絶対嘘だな。でもまあこれをやらなきゃカラードに登録されないだろうしな。

「おい、ミッション開始だ。下りたことを考えてないでせつと行け。」

「了解」

いま通信で厳しいことを言つてきたこのバロ「貴様、ミッションが終わつた」「ゲフンゲフンー」この綺麗なお姉さんは、俺のオペレーターをしてくれているセレン・ヘイズだ。

俺は約一年前に拾われてから、独立傭兵のリンクすとなるべく鍛えられてきた。

そして今回、カラードに正式に登録するために企業連のこの依頼をこなすわけだ。

ちなみに今、俺が乗つているネクストは旧レイレナーードの03-A LIYAHをベースにしたのをストレイドという名でセレンさんが用意してくれた。

どうやつて手に入れたのか気になり一度、聞いてみたんだが…

「なに、ちょっと話をしたら譲つてくれたぞ。」

とかなんとか言つていた。しかも話し相手は顔を真つ青にしてたら

しことのことだ、恐ろじこ…

「企業のネクストだと？」

「畜生、こんなときには限つて！」

（さて、さつさと終わらせるか）

そう思つと次々と守備部隊をに倒していく

「目標、残り約半数」とセレンから通信が入る

「クソツ、効いているのか？」

「プライバル・アーマーだ、まずはプライバル・アーマーを減衰させるんだ！」

そう言いながら必死に抵抗してくる相手をさりに倒していく

「目標、残りわずかだ」とまた通信が入る

「通常兵器では太刀打ちできん！」

「ノーマルはまだなのか！ノーマルは！」

相手の言葉を気にせずに残りの敵を排除していく、最後の敵を排除したかと思つと

「敵、増援を確認。ノーマル部隊だ、油断だけはするなよ」と通信が入つた

（めんどくせーさつさと終わらせよつ）

そう思つて、増援できたノーマル部隊を殲滅していく。すべて倒すと

「よくやつたな、ほぼ完璧だ…とは言え、あまり調子付くなよ。敵が弱すぎたのだからな。」

とミッション終了の通信が入つた

（やつと終わつたか…あれ？でもこのまま戻つてもさつきのことでも俺、セレンさんに殺されるんじゃね？でも、ミッションはほぼ完璧だったから見逃してくれるかな…無理だな、あきらめよつ。）

そう思い帰還を始めるのであつた。

そして、ラインアーケ襲撃のあとカラードに新たなリンクスが登録される。そう…このあと次第にカラード全体を騒がせることになる後の首輪付きである。

そしてラインアーケ襲撃から2ヶ月ほどたつころ、ジョン・ドウ（レイジ）はカブラカン撃破の依頼を断り、SOMの撃破の依頼を受けることになっていた。

（オーメルからの依頼か、まあ俺は構わんが…メルツェルめ、何を考えている？）

そう思いながらもオーメル仲介人の説明を受ける（VOBの使用か、また小細工して爆発されそうだな…まあ、いいか）

などと考えている間に仲介人の説明も終わっていた。

（それにしても、あの仲介人の話し方、イラッとするな…俺だけか？）

とくだらないことを考えながらも依頼を遂行するべく準備をしていた

そして数時間後、ミッション開始時間

「では、リンクス。ミッションを開始してください。」

「了解」そう言いレイジはOBを起動する。すると次第に加速していきVOBが点火し、いっきに超スピードになる。

（どうやらVOBに異常はないみたいだな）

そう思いながらも迫り来るSOMの砲撃をかわしながら彼我の距離をつめていく

VOB 使用時間、限界近いです。通常戦闘の準備をお願いします。

そう通信がはいり、少しして

「VOB 使用限界です。バージします。では御武運を」

と場違いな声がしたぼうを見てみると、ギルードーサーが突っ込んできたのだ

「でな

そう咳いていると

いだろう、相手になつてやる」「

そつ言い右背をECC-O300に左背をDEARBORN03に切り替え、ギルドーザーに対して撃ち、QBを使い死角へと回り込むと03-MOTORCOBRAと051ANZRでひたすらに撃ち続ける。

そしてギルティー・ザ・両手のGAN01-SS-WDを撃つよりと突つ込むが難なく回避され銃弾の雨を浴びせられさらにボロボロになる。

「めんどくさくなつてきたな… もう終わらせるか。」

Rを捨てて格納してあるレーザーブレードのE8B-0600で死角

から確実にコアを切りつける。するとギルダーザーは
「やつぱりかああああ！」

と叫び声が聞こえると沈黙した。

「さて、予定より時間をかけてしまったな。さあ砲台を壊して
行くか！」

そう言い、砲台に近づき一閃、一閃と切り裂き、もつ一つの砲台も
同じように切り裂き破壊するといつもが崩壊し始める

「総員、地上装備！総員退避！退避しろ！」マザーウィルが崩壊する
ぞ！」

そういうの隊員が言つのを聞き、OBをふかし爆発に巻き込まれ
ないよう離脱する。そして安全圏まで離脱すると

「ひらりネームレス・ワンだ、SOMを撃破した。」

「マザーウィルの撃破確認しました。速やかに帰還してください、
お疲れ様です。」

そう聞くと通信を切り帰還する。

そしてほぼ同時刻、レイジが断つたもう一方のカブラカンを撃破す
る!! リッシュは首輪付きがこなしていたのであつた

カラードside

「あの無名のリンクスが、あのマザーウィルを……？」
「はい、間違いありません、ローディー様、カラードは情報の精度
を確認しています」
「・・・」
「仮にもリンクス、本来そういうものだ」

「だといがな…それよりアルテリア襲撃犯はどうなつてゐる? 堂々とクレイドルの要諦を狙われ、すべて不明、全く打つ手無しなど、管理者の存在意義が問われるだろ?」

「その通りだ、ルールを守れないのであれば、静かに退場してもらう他はない。それがラインアーケであれ…レイレナードあたりの亡靈であれ…」

side out

リリウム side

私は今回のマザーウィルが撃破されたことに興味を持つていました。いえ、マザーウィルが撃破されたほうではなくて、撃破したリンクスについて興味をもつていました。もしかしたらあの人ではないかと、そしてマザーウィルを撃破したリンクスは、あの人気が死んだと言われてから数日之内に急にカラードに正式に登録をされ、その内容はあまりにも自然すぎるもので、私は、あの人は実は生きているんじゃないかと…そして今回のことによりいつそう真実に近づけたと思いました。

side out

ORCA side

「カブランをおとすか。どうして、なかなかいるものだな」「ああ…モノによつては、首輪をはずそうと思つ」「ハリのように、か? それもいいがなメルツェル」「案ずるなよ、ジュリアス」

「間も無く、マクシミリアン・テルミドールは我々に戻る…それで準備は終わりだ」

side out

カブラカン撃破から約1ヶ月後、首輪付きのもとへ企業連からホワイト・グリント撃破の依頼が来て首輪付きはそれを受託する。そしてレイジの方にはラインアークから依頼が来て、それを受託した。

「これで、後は計画通りやればいいのか…」

そう言い、依頼の為に準備を始めるのであった

そしてラインアーク防衛戦が始まる。企業連側は、ランク1のステイシスと首輪付きのストレイド2機に対して、ラインアーク側はランク9のホワイト・グリントとネームレス・ワンの2機で応戦する。戦闘は最初から激しかった、そして中盤に差し掛かった頃、最初に落ちたのはネームレス・ワンである。ステイシスのレーザーバズーカER-0705により戦闘不能となり海中に没する。そして次にステイシスは距離をとるためか、OBを使い移動し、それをホワイト・グリント逃がさんとばかり追う。結果ホワイト・グリントの撃つた弾丸がステイシスのメインブースターに直撃し水没し、1対1になり、ホワイト・グリントもすでに疲弊しきつているにもかかわらず2機の戦いは凄まじかった、そして最後に勝ったのはストレイドであった。

ラインアークの最も重要な戦力、ホワイト・グリントは失われ、オツヅダルヴァとジョン・ドウも水中に没する。こうしてラインアー

クでの戦闘はただ一人のリンクスだけが生き残つて終わる。そしてクレイドルは、安定期に入った。誰もがそう考え、企業は来るべき経済戦争の激化に備えはじめる。だが、まさこのとき、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのだ。

ORCA side

「ホワイト・グリントは戦闘不能。ステイシスとネームレス・ワンは海中に没し、オット・ダルヴァとジョン・ドウは生死不明、か」「これはちょっとな」
「ああ、やりすぎだな、メルツェル」「よく言う、誰が手間を掛けさせたのか」「すまんな、完璧主義者なんだ」「…まあいい、これでやっと元に戻つたんだ。時期もある、クローズ・プランを開始しよう」「そのことだが…少しだけ待てないか?」「パートナー、か」「ああ、強いだけの阿呆でもないようだ、試す価値ぐらいはあるまい」
「状況は既に手遅れだが、同時に緩慢だ。今更焦ることもあるまい」
（さて、あの首輪付きは俺たちのところに来るかね…？）

そして数日後、首輪付きのもとある依頼が届いたのであった…

side out

第6話（後書き）

このペースで行くと明日にはA C f aの世界が終わり、I Sの世界に突入することができないです。

なので一生懸命頑張るので、よろしくお願いします。

第7話（前書き）

更新が遅くなつてまことに申し訳ありません

リアルの用事がかなり伸びて家に帰つてくるのが遅くなり更新が遅りました。

すいません（――；）

いろいろ独自設定みたいなものを加えたルートとなつております。
そして、一応今回の話でA Cの世界は終わります。
そして無駄にながいですがどうぞご覧ください。

第7話

首輪付き side

首輪付きのもとへ、一件の依頼がくる。依頼人は“ORCA”そして依頼内容は

「初見となる。こちらマクシミリアン・テルミドールだ。GAのアルテリア施設、ウルナに侵入しすべてのアルテリアを破壊してほしい。」

この作戦は、クレイドルの前提を覆す、明確な反逆行為だ。それを理解した上、で私の言葉を聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだらう。

これは扇動だが、同時に事実だ。それをよしとしないのであれば、私の依頼を受けてみないか？

勿論、報酬は払おう…期待して待つていい。

との内容のことであった。そして、首輪付きはこの依頼を受けることにした…

そしてアルテリア・ウルナ破壊ミッション、開始。

「ミッション開始、目標は遙か上だ、登つていぐぞ…」

「わかつてゐるな？自分がやるうとしていることの意味が…」「わかつてゐるよ、セレンさん。今からやるうとしていることによつてどうなるかは…」

俺は、今まで他人から言われたままにしか行動しないでいたけど、今日は違つ。

確かに扇動されたと言わればそれでおしまいかもしないけど、俺は今、自分自身で出した“答え”によつてここにいるつもりだよ

「そうち…」

セレンはそう呟くと、そこで通信がいつたん途切れた。

そしてストライドは、最短ルートで上昇していき目標までたどり着くと、周りの防衛部隊を壊滅させ、目標を次々と破壊していく、そして最後の1つを

「これが、俺の出した“答え”だ」

そう言つと、いつもより重く感じる引き金を引いた。

そしてミッション終了後

「君の答えは、見せてもらつた、よつてこそORCA旅団へ」と連絡が入り、このときをさかいに首輪付きは、ORCA旅団へ加わつたのであつた

そして首輪付きがアルテリア・ウルナを破壊してから約1週間後レイジと首輪付き、二人にほぼ同時に依頼がはいる

レイジ side

「さてクローズ・プランを開始する。ジャック（レイジ）、君にはアルテリア・カーバルスを首輪付きとともに襲撃してもらいたい。」

「首輪付きと一緒にいか?別にかまわないが、あいつ一人でも充分だろ、保険だとしても後方で待機していればいいと思うんだがな」「まだ、完全に彼の力を把握しきれてないからな…」

「ふむ、そういうことにしておこう。それにしても、ずいぶんとあることのことを気に入っているみたいだな」

「ふつ、まあな…」

「では、俺は行かせてもらおう」

「ああ、最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ、派手にいこい」

「う」

side out

首輪付き side

「マクシミリアン・テルミドールだ、クローズ・プランを開始。主要アルテリア施設に対し、ネクストによる同時攻撃をかける。

君のターゲットは、大規模アルテリア施設、カーパルスだ、防衛施設の要、ノブリス・オブリージュをジョン・ドウのファンタズマとともに撃破してくれ。

施設には多数の防衛部隊も展開している、ノブリスの到着前にこれを叩くことができれば、その後の戦闘が幾分か楽になるだろう。最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ。諸君、派手にいこう」「ジョン・ドウ?ラインアーヴのホワイト・グリント撃破のときのやつか…まさか生きてたのか?…じつにせよ今回は味方らしいから、まあいいか)

首輪付きはそう思つて、ミッションの準備をしにかかつた

side out

アルテリア・カーパルス襲撃ミッション開始

「ミッション開始、カーパルスを制圧する。

ノブリス・オブリージュが戻る前に、可能な限り防衛設備を破壊しておけ、それだけ楽になるのだからな」とセレンからの通信が入る

「お前が、噂の首輪付きか。今回のミッションをともにする、ジョン・ドウ、ファンタスマだ。よろしく頼む」

「ああ…なあ、あんたは」とレイジに質問をしようとする
「すまんが、聞きたいことがあるならこのミッションが終わつた後にしてくれ」とレイジの言葉にさえぎられる

そして二人は次々とカーパルスの防衛設備を破壊し、約2分ほどで全て壊滅させる、するとセレンから

「敵ネクスト反応、急速接近。くるぞ！ 本番だ。敵ネクスト、ノブリス・オブリージュを排除する」

と通信が入る

「ほう、意外と早かつたじゃないか。いくぞ首輪付き、まあ見物するならするで構わんがな」

そう言いながらレーダーを確認するレイジ。すると

「空き巣とは、なんとも情けない…匪賊には、誇りもないのか？生き易いものだな、羨ましいよ」

と言いながら、ノブリス・オブリージュがOBで突っ込んでくると右手に持っているMR-R102を撃つてくる

「さあな…たとえあつたとしても貴様に教える気は無いがな」
レイジはそう応えながら右手の03-MOTOR COBRAと左手の051ANNRで応戦する

そして首輪付きは、右手の063ANARと左手の01-HITM

A Nでレイジにあたらないようになノブリスを横から撃つしていく

「そうか、2対1でいんどんでくるとは…さらに情けないな」

「ジョラルド・ジョンドリン、貴様は勘違いしているぞ。これは決闘ではなく戦争だ、戦争に2対1で卑怯などとは言つてられないんだよ。それなのに誇りだのなんだのと言つてたら無様に死ぬだけだ」

「なんだと…？」

「ふむ、いいだろう。貴様が望むようにな1対1で勝負をしてやるつ。まあ、貴様の誇りなんぞ興味無いがな」

「その行動…後悔してもらおつ」

「てことで、すまんな首輪付き」

「いや、構わない」

そういうと首輪付きは攻撃をやめ離れる。そして真つ先に動いたのがノブリスである

右手のMR-R102で弾幕を張りながら左背のEC-0307A Bを確実に当てるこようとする。だがレイジはそれを、QBを使い難なくよけていき03-MOTORCOBRAと051ANZRで撃ち返し確実にノブリスのAPを削つていく。

「どうした？ そんなものか…誇りだのなんだの言つといてその程度とはな、だつたらそんなもの（誇り）、狗にでも喰わせておけばいい」

「貴様つ…！」

ジョラルドは珍しく、怒氣を含んだ声で言い、左背のEC-0307ABをページし地面に落とすと、左手のEB-0305でレイジに切りかかる。

が、レイジはそれをあつさりと避け右背のEC-0300でノブリストのコアを確実に撃ち抜く。

「信じられん…ノブリス・オブリージュが、こつまで押さえられんとは…」

そう言い、ノブリス・オブリージュは沈黙した

「ネクスト、ノブリス・オブリージュの撃破を確認」

とセレンから通信が入る。

「身勝手な行為、すまなかつたな。首輪付き」

「気にするな、」ヒーリーは樂できたと思えばいいぞ」

そう会話すると

「やはり敗れたな…ジョラルド・ジョンドリン。貴族の務めなど、大層な御託の割に…クククッ。まあ、俺が尻拭いをしてやるとするか」

と声がする。するとセレンが「増援か、なるほどな。」とどこか納得したように言つて

「一機でかかればよいものを…敵ネクスト、トラセンドだ。これも排除する。

別行動を後悔させてやれ」と続けて言つた。

「了解。じゃあ、ヒーリーもおまかせだよ」

「了解した」

そう言つと首輪付きとレイジはトラセンドに向かっていき銃弾の雨をひたすらに浴びせる。トラセンドは必死に振り切ろうとするが全く振り切ることができず一方的にやられた

「フツ…勝つて、勝つて、最後に負ける運命か…お前らも同じだ。それまで、精々浮かれてるがいい…」

そういう残すとトラセンドも沈黙する

「ネクスト、トラセンドの撃破を確認。ミッショング完了だ。…クローズ・プランのはじまりか」

と言い、首輪付きだけに

「後悔するなよ、お前の選択だんだからな」と通信を入れる

「わかつてゐよ、セレンさん」

こつしてアルテリア・カーパルス襲撃のミッションは完了した

7月、多くにとつて突然に、それは起つた。

正体不明の、複数のネクスト機による、アルテリア施設の同時襲撃、その殆どは成功し、クレイドルは、抛つて立つエネルギー基盤を大きく揺るがされた。

そして、ORCA旅団と、旅団長マクシミリアン・テルミドールの名で、ごく短い声明が、世界に発信される。

“ To Nobles Welcome to the Earth ”

それは、すべての空に住む人々への、明確な宣戦であつた。企業は、安全な経済戦争を放り出し、狂氣の反動勢力にたいすることを余儀なくされ、人々は、覚束ない足元にはじめて気付いたかのように、それを恐怖するしかなかつた。

ミッション終了後、首輪付きトレイジはある部屋で話していた

「 なあ、あんたは、ラインアークで俺と戦つたやつで間違いないよな？」

「 その通りだ 」

「 なんで、ORCAに入つたんだ？ 俺みたいにテルミドールに誘われたのか？」

「 そうだ、と言つても俺の場合は、ずいぶんと前に企業に殺されそうになつてな、瀕死のところをあいつに助けてもらつてだけな 」

「 企業に殺されそうにって、じゃあ企業に復讐のためにはいるのか？」

「違うぞ。まず、俺は復讐なんてものは考えたことがない。俺がここにいるのは企業が支配するこの世界に未来はないと考えると、ある意味、贖罪のためだと言つてもいいな」

「贖罪?」

「そうだ、贖罪だ…自分の友を、見殺しにしたとも言えることをしてしまったからな」

「でも、戦場だったなら仕方ないんじゃ…」

「確かに、そう言えば楽かもな…だが、戦場だったからなどと何かを理由にして自分の罪から逃れようとしてはいけない。たとえ自身の罪から田をそらしたところでその罪は消えないんだ。だからこそ自身の罪と向き合い生きてかなければいけない。少なくとも俺はそう思つている…お前も自身の罪から田をそむけないようにな」

そう言つとレイジは部屋を後にした

そして三日後、

レイジのもとへ衛星軌道掃射砲防衛の依頼がはいる

「衛星軌道掃射砲の存在が、企業側に漏れた」

「なるほど、企業連は全力で潰しにかかるだろうな。で、クローズ・プランの要諦である衛星軌道掃射砲を守ればいいんだが、単独ですか? それともパートナーをつけてくれるか?」

「話が早くて助かる、銀翁と共に守ってくれ。そしてすまないが、銀翁以外に追加の戦力を用意することはできない」

「そうか…ん? 首輪付きはどうした?」

「彼には、オールドキングを肅清しにいつてもいい」

「なるほど…やはりオールドキングは、クレイドルを落とそうとするか」

「なんだ、気づいていたのか?」

「まあ、じゃあ、さっそく準備をさせてもらおう。前のミッションで手に入れたものも試してみたいからな」

「やうか、では、頼む」

そして通信が終わるとレイジはネクストのある格納庫へ歩いていった

衛星軌道掃射砲防衛ミッション開始

「この作戦のパートナーは、お前さんか、期待をせてもいいだぞ。あと私は、アサルト・キャノンを使う、くれぐれも巻き込まれるなよ。君だと手、無事では住まんのだからな」

「了解した。」

レイジはそう短く応えるとOBを使いAF・イクリップスの上に取り付き右手の03・MOTORCOBRAと左手の051ANZRをひたすらに撃つ。

そうすると、あつといつ間にイクリップスがボロボロになり撃破される。

「アンビント、目標を確認しました。問題ありません、作戦を開始します」

と言ひながら、攻撃していくネクストを確認する。するとレイジは

「つ！」

と、思わず驚きの声をあげようとしてしまう。それもそのはずかもしない…なんせ、目の前にいるのは昔、自分が助け、髪飾りをプレゼントした少女。そう、リリウムなのである。

レイジはどうしようもなく叫びたかった。なぜ、なぜ、こんな所（戦場）にいるんだ！と、だがここで冷静さを失えば全てが終わってしまうと考へ必死に冷静さを取り戻した。

（どうする？どうすれば殺さずにする？どうすれば…）

彼は今、自分の中の矛盾に酷く焦っていた。そう例えどんな相手だろつと戦場に生き残るために殺すという考えでいて、今回も心を非情にしてそうしようと思つても、なぜかそれができないのである。もしここで選択を間違えたら取り返しの付かないことになると直感的にわかつていた。

（今までさんざん自分に非情になれ。そう言つてきたのにな、笑わせるだが…たとえ矛盾で、身勝手な自己満足で他人から偽善者と罵られようといいさ、今回は俺のやりたいようにやるさ）

そう決断すると先ほどまでアンビエントの攻撃をほぼ避けるだけでいたレイジは03-MOTORCOBRAと051ANNRで応戦はじめる。

レイジはアンビエントの死角に必死に回り込み腕か足の間接部とロアをあまり大破させないようにメインブースターなどを攻撃していくが相手はランクはN.O.・2である。いくら政治的な理由でN.O.・2とされたからといって弱いわけではなくしっかりと強いのである。ただ倒すだけであつたら何の問題もないだろうが、今回は殺さないようにしているのである。

そしてアンビエントとファンタズマが激しい攻防を繰り返していく消耗戦になると思われたが、突如均衡が崩れたのである

遠距離からネオニダス（銀翁）のネクスト月輪の左腕のプラズマライフルFLUORITEが撃たれリリウムが慌ててそれを回避しようと隙ができるレイジはその隙を見逃さず左手の051ANNRを捨てて格納されているレーザーブレードEB-O600でアンビエントの片足を確実に焼き切り、バランスを崩したところをすかさず03-MOTORCOBRAで追い討ちをかけ行動不能状態にする「アンビエント、戦闘不能、作戦は失敗です。

「アンビエント、戦闘不能、作戦は失敗です。

すみません、王大人。リリウムは」「信頼に背きました」

そういうつてると突如、弾丸が飛来し、その弾丸は、アサルトキヤノンをサイレント・アバランチを破壊するために撃つた直後でありP

Aが回復しきつてない月輪のコアにあたる

「ぐつ！」

「遠距離射撃…まさかストリクス・クアドロか！銀翁、大丈夫か！」

「ほひ、さすがに気づくか。よい勘をしている」

「なんとかな、にしても密かに狙撃とはな、実にあの男らしい」

そう言いながら月輪がストリクス・クアドロに近づいていき交戦を

始める。すると王小龍は

「リリウム」と呼びかけ言葉を続ける

「貴様は私が貴様に信頼しているだのと思つてゐるが勘違いをするな、私は今まで一度も貴様を信頼だのとは思つたことが無い。それにしても役に立たない駒だつたな。ネクスト一機すら落とせずにいるのだからな。まあ貴様の代わりなどいくらでもいるからなもう用は無い、消えろ」

そう言つとリリウムは

「そん、な…」

と今にも消え入りそうな声ので喋る

そして王少龍は動けないアンビエントに対しコアに狙いを定め引き金を引いた

だが弾丸が到着する前にレイジのファンタズマが間に入り盾となる

「下種野郎が…」

レイジはそう言つと両背のECC-O307ABをストリクス・クアドロに向けて撃つと相手の左腕を吹き飛ばす

そして立て続けに月輪がHLR01-CANOPUSを撃てると

「ふむ、やはり私ではこの程度か」

そう言つとストリクス・クアドロは撤退していく

「尻尾を巻いて逃げるがよいよ、王小龍。戦場に陰謀家は不似合いだ」

それでも、どうやらわしもここまでのよつだな

「銀翁、すまない…」

「なに、気にするでない。もともと長くない命だ、なに、作戦は果

たせた悔いはない。君が氣負つことではない。」その後のことには頼んだぞ？」

「ああ、まかせろ」

「そうか、遂げろよメルツェル。」

そつ言つと銀翁からは通信が一切返つてこなくなつた

そしてレイジはアンビエントに近づきファンタズマを降り「クピットのハッチを外部のスイッチで強制的にあける。すると中にいたリウムはレイジのことを見ると

「あなたは…レイジ、さん？ よかつた、また、会つことが、できた

…」

そつ言つとリリウムは氣を失う。するとレイジはリリウムを自分のネクストに乗せ帰還した。

そして衛星軌道掃射砲防衛の作戦の翌日

「作戦の翌日ですまないが、そつそくハッシュョンの説明をさせてもらつ。

ミッショーン内容はインテリオル＝オーメルの最新型AF・アンサラーを撃破してくれ

「あの、最新ゴジマ技術の塊か」

「ああ、他のAFと比べても、圧倒的な戦闘力を持っている」

「だが、それを制すれば、一気に最終段階、だろ？」

「その通りだ、そしてメルツェルの予想だと相手はこれにさらに追加の戦力、恐らくネクストあたりを入れてくると思っているらしい」

「アンサラーともにか？」

「ああ、どうやら使い捨てをするつもりのようだ」

「なるほどな、いかにも企業運らしいな」

「確かに、そしてこのミッションの開始は6時間後だ、頼んだ」

「わかった」

そう言いレイジは自分の部屋にいったん戻った

リリウム side

「いじは…」

リリウムは目を覚ますと目の前には白い天井がある。

そして上半身を起こし周りを見てみるとリリウムには見覚えが無い部屋だった。

そしてリリウムは、起きた出来事を思い出そうとしていった。

（そう、私は王大人に捨てられたのでしたね…でも最後に気を失う寸前にレイジさんが助けに来てくれたような気がします。たとえ夢だったとしてもまた会えて嬉しかったです）

そう思うと。リリウムは急に涙を流し始める。

すると、扉が開き部屋に誰かが入ってきた。そして

「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言ってくる人をみると、その人はレイジだった

side out

レイジはテルミドールからミッション内容を聞くとリリウムを寝かせている部屋にいき、そしてドアを開けるとリリウムは泣いていた
「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」
そう言うとリリウムはこちらを向く

「レイジ、さん？」と声

「ああ、久しぶりだな、リリウム」

レイジはそう言いリリウムの頭を撫でる。するとリリウムは

「会いたかった、ずっと、ずっと会いたかったです、…！」

そう言うとリリウムはレイジに抱きつき涙を流す。そしてレイジは泣いている妹を落ち着かせるかのようにして頭を優しくそっと撫でるのであった。

そしてリリウムが落ち着くと、一人は今までのことを話していた。レイジはリンクス戦争のあと自分がどうなり、どうしてORCAに入ったのかを、そしてリリウムのほうもウォルコット家に迎え入れられてからなどを、そしてあつと/or/いう間に時間がすぎ、ミッションの時間が迫る

「レイジさんは、だからORCAに入ったのですか…」

「ああ、他人からみたら笑える話だろ？」

「そんなことないです！少なくとも私はそ/うは思/いません！」

リリウムはそう力強く言つ

「そう言つてくれるか、ありがと/」

そう言い微笑みながらリリウムの頭を撫でとリリウムは少しうつむき頬を赤らめる

するとp.i.p.i.p.iと携帯端末から電子音がし、見てみるとミッション開始の2時間半前であることをアラームが知らせてくれた。

「悪いが、今からミッションなので私は行くとするか」

そう言い椅子から立つとリリウムが袖をつかむ

「さつきも言つたが、ミッションには連れて行けないぞ」

「大丈夫です。だから考えました、私をオペレータとしてください！」

「オペレータはいなくても大丈夫なんだがな…」

「いえ、今回のミッションはとても危険なんですね？でしたらリリウムが受けます！」

「だが、オペレーターの知識は」と言おうとしたところをさえぎられ
「いえ、ウォルコット家の教育の中にオペレーターとしての教育も
あつたので、完璧にすせてあります」と言つ
それを聞きレイジは自分のこめかみを軽く押さえ考え込む。すると
リリウムが

「私は、不安なんです。もしかしたらレイジさんがまた急にどこか
遠くへ行つてしまつのではないかと…」 そう静かに言つ。それをレ
イジは見て

「わかった、よろしく頼む」

「はい。」 とリリウムは力強く返事をした

そしてAF・アンサラー撃破ミッション開始

「ミッション開始です。AF・アンサラーを撃破してください」

「了解。さてあれをどうするか…」

「そうですね…もしかすると、あれほど巨大なものを浮かしている
ということは、無理をして浮かしてくるかもしません。どこでも
構わないで外装を破壊していいください。そうすれば何れもた
なくなり、崩壊するはずです」

「わかった、助かる」

そつレイジは、直つとアンサラーに近づいていき外装部分を左腕の

“07-MOONLIGHT”で切り落としていく。そう、この“
07-MOONLIGHT”は先日ミッションから帰還後に真改か
ら、ずいぶんと昔、アンジェが死ぬ前にレイジに渡すよう伝えら
れてたらしく左腕の“07-MOONLIGHT”を受け取ったのだ
「まず一枚目」

そういうながら次の外装部分を破壊していく、すると

「作戦工リア全域に高濃度ゴジマ粒子確認！」これではPAがやくにたちません、こちらだけPA無しと言つことになります。それにしてもこのあたりは閉鎖空間ではないはないんですねよー企業はこの地上をどうするつもりなんでしょうか…」

「さあな、それを考えるのは後にしよう」

そう言つてゐるあいだも無数のミサイルがまた襲つてくる（やはり、このミサイルの発射口から潰していくか）

そう考えるとレイジはミサイルの発射口を潰しにかかる。そして天辺の発射口を潰しにかかると

「中心に大規模ゴジマ収縮、離れてくださいー消し飛ばされてしまします！」

トリリウムが焦りなが言つとレイジは急いで退避し直撃はしなかつたものの少しくらつてしまふ。そこに追い討ちをかけるかの「」とく無数のミサイルが来る。それをなんとかQBを使い避けようとするがいくつか当たつてしまふ。

「AP 40%減少！」

その言葉を聞き必死に発射口を潰す。

（これでミサイルの発射口はすべて潰した、次だ！）

そう思い次々に外装を破壊していく

「アンサーー、そろそろ限界です。アンサーー落ちます、巻き込まれないでください」

そういうQBを使いその場を離れるレイジ

「アンサーーの大破を確認しました。…つー！そちひた高速で何か接近してきます！これは…プロトタイプネクストー…どうしてそこまで…？」

（やはり、ORCAだけではなく企業側ももつていいたか）

「おそらく企業のだらう、そいつも破壊する」

「無茶です！すでにAPが半分をきつています、撤退してください！」

「心配するなリリウム、俺を信じる」

「わかりました…必ず、必ず帰ってきてください」

「ああ」

レイジはそう言つとプロトタイプネクスト、00-ARETHAにアレサ
向かっていく

プロトタイプネクストはレイジの乗るファンタズマを確認すると右腕のガトリングでうつてくる

それをなんとかかわしながら右手の03-MOTOR COBRAで撃ちながらどうにか隙をついて左の07-MOONLIGHTで切り刻むがプロトタイプネクストはまるで消えたかのような速さのQBを使われせいぜいかすらせることしかできない、そしてガトリングによりどんどんボロボロになるファンタズマ

（もう限界が近いか…だが確かやつは、コジマキヤノンを使う前に動きを止めるはず、そこにかける！）

そう思い必死に避けるレイジ、そしてついにプロトタイプネクストは動きをとめコジマキヤノンを使おうとする。するとレイジはプロトタイプネクストに対して突っ込み左手の07-MOONLIGHTで切りかかる、するとプロトタイプ・ネクストはコジマキヤノンを発射する。だが直撃はせず、ファンタズマの右腕と右背のEC-0307ABが吹き飛ぶ。だがレイジはそれでもとまらずに左手の07-MOONLIGHTを振るつうとプロトタイプネクストのコアを完璧に焼き切つた。するとプロトタイプネクストはコジマ粒子を漏らしながら爆発していった。すると

「レイジさん！大丈夫ですか！？レイジさん！」

リリウムが泣きそうな声で通信をしてくる

「ああ、なんとか、終わ、つた…そして、すま、ない
俺は、もう、駄目、みたい、だ…」

「そんなことつ、そんなこと言わないでください…」

通信越しに必死に叫ぶリリウム

「いや、いい、んだ、最後、に、お願ひ、が、あるん、だが
「大丈夫、です。なんでも言つてください」と泣きながら答える
「俺、の、死を、氣負、わないので、くれ、そして、つよく、生きて、
くれ……」

（テルミードール、先に逝つて待つて、首輪付き、成し遂げろよ…
そして、ベルリオーズにアンジェ、今、そつちに逝くよ…）

その言葉を最後にレイジからは一切、返答が返つてこなくなつた…

第7話（後書き）

前回の話みたいに結構無理やりなところがありますがそこら辺はで
きればスルーの形でお願いいたします（汗）

なんはともあれこれでエラの世界に飛び立つことになります。
そしてアンケートの結果ですが

首輪付きもエラの世界に突つ込むことになりました

アンケートにご協力してくださった方本当にありがとうございます。

ぜひ、これからもよろしくお願ひします。エ（ーー）エ

第8話（前書き）

はい、前回ACの世界で死んだので
今回からEISの世界にきましたがまだEIS本編にはなりません
本当に申し訳ない。

次からはだんだんとEISに関わるようになつてこりますので、
よろしくお願ひします。

第8話 ～真・プロローグ的～

冷たい雨が降っているなか、とある少年が目を覚ます。

「ここは…」

そう言いあたりを見回すとどうやらどこかの路地裏みたいだ。

「なんで、こんなところに…俺は死んだんじゃなかつたか?」

そうぼそつと呟くと、はっと気づいたかのように自分の体をみると驚きの声が隠せなかつた。

「なん、だと…?」

それも、そのはず。彼の体は5歳ぐらいの少年になつていた。

(あれか?「ジマの力か?それともスタンドの能力か?もしかして某少年探偵コ○ンの黒ずくめのあの薬か?)

そう冗談まじりに思いながら自分の服装を確認する。

彼の服装は、ボロボロの長ズボンに、長袖か、そしてこのでかいマントのようなボロボロの布切れである。

そしてその服装から自分がどのような状況かを推察してみると

した。

(おそらく、また別の世界に來てしまったのか?そしてあれか、この世界では親に捨てられたかなんか?それとも誘拐事件などに巻き込まれたか?まあとりあえず人通りのあるところにでてみるか) そう思い、めんどくさそうに片手を首に軽く当てる手に違和感を感じ慌ててもう一度手で触り確認する、しかし触れば割るほどともも覚えのあるものだつた。

「まさか、AMSか?鏡を使って見ないことにはなんともいえないが、おそらくそうだろうな」

そう愚痴りながらも人通りのあるほうへ歩いてこき、路地裏をぬけ

ると田の前の光景に少し驚く。

「まさか、俺は戻つてこれたのか？」

そう、田の前には少し変わつていて、自分がずいぶん前に、日常的に見ていた日本の光景であるからだ。

「あたりに所々置いてある店の看板も日本語だ」

そう言いながら突つ立つて、行き交う人々からかるく視線を感じると自分の姿がのことふと思い出す。すると慌ててその場から離れるためにどこかに走つて、ある程度離れると止まり、辺りを見渡す。どうやらいつの間にか人通りの少ないところに来てしまつて、いよいよあつた。すると体の力が急に抜け倒れてしまつ。

「あれ？ 力が、はいんない……？」

そう、さつきまでは無我夢中で動いていたが、この体はおなかが极限にまで減つており、栄養不足とも言わんばかりの状態であつた。

「これつて、まずいんじやないか？ はあ……転生そうそうこうなりこれとは、運が無いなまつたく……」

そう言つて、ボーッと何も無いような景色を見ていた。すると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と言い慌てて駆け寄つてくる女性。すると男性が近づいてきて

「君！ 大丈夫か！？ 今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張つてくれ！」

そう言つて、孝弘と呼ばれる男性はレイジを車に乗せ移動していった。

とある男性 side

僕は三嶋 孝弘といい、とある町の小さな病院の院長だ。

今日は、病院の皆が、娘の由利香の誕生日だからと言つて妻の裕子と共に早く帰るよつにと氣を使つてくれたから、そのお言葉にあま

えて妻と一緒に帰ることにした。そして帰り道の途中に妻が急に

「孝弘さん止まつて！」

と言つたので慌ててブレーキをおもいつきり踏んだ。すると道の端の方に人のような大きさのものがあった。すると妻は慌てて車を降りて駆け寄つていく。僕も降りようとすると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と聞くと僕も急いでその子の近くにいき声をかけた。

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張つてくれ！」

僕はそう言つと妻と共にその子を車に乗せると病院にむかいアクセルを踏んだ。

side out

「…」「は？」

そう言つて目を開けるレイジ

（何度も目だらうか？この状態になるのは…）

そう言つてると扉の開く音がして白衣姿の男性が入つてくる。そして男性はレイジが目を覚ましてるのを見て

「よかつた、目を覚ましたんだね」「

と安堵の表情で言つた。

「あなたが助けてくれたんですか？」

「そうだよ、僕の名前は三嶋 孝弘っていうんだ、この病院の院長をやつているんだよろしく。でも驚いたよ、僕が帰る途中に妻が倒れてる君を見つけたんだ」

「そうですか、ありがとうございます。あつ、あと俺の名は久瀬

零治です」

「零治君か、よろしく。」

「そつ微笑みながら言つと

「あと、起きたばかりで悪いけど質問をしてもいいかな？」

と少し真面目な表情になる孝弘。

「ええ、大丈夫です」

と零治が言つと

「まず君の親御さんはどうしているかわかるかい？」

「いえ…わかりません」

「そうか…次に、なぜあんなところに倒れていたんだい？」

「気づいたら、路地裏にいてそこから途方もなく歩いていたたら、急に体に力が入らなくなつて」

「てことは、その路地裏にいた前の記憶はないということかな？」

（やつてしまたな、名前はおぼえてるのにそれ以外が都合よくぬけてこるとなると、あやしまれるだらうな、さてどうする…）

そつ自分のミスをどうフォローしようか必死に考えていると孝弘は「ふむ、過去の出来事はとても思い出したくなくて自分の名前以外を思い出さないようにしているのか？それとも…」

などと、ぶつぶつと独り言のよう喋つていき

「多分、君は本能的に嫌なことを思い出さないようになつていてるつな」

と零治の状態を告げたのであつた

（まさか、納得したのか？まあ何も追求されずにすむならそれでいいが…）

と思つてゐると

「最後に一つだけいいかな？」

「はー…」

「首のところに埋まつていてる機械は、なにかな？」

そつ言わると零治は一番聞かれたくないことを聞かれて一瞬、とても驚くがすぐさま冷静に落ち着き

「首…？」

と知らなかつたかのように言ひ、自分の首を触りまるで初めて氣づいたかのように演じた。それを孝弘はみて

「どうやら知らなかつたようだね、すまない。もしかしたら君はそのことが嫌で記憶を閉ざしたかもしれないのに」

と申し訳なさそうに言ひ。

「いえ、驚きましたけど記憶が無くてなんとも感じないので大丈夫です」

「そうか、ありがと。で、今の君にこんなことを言つのもあれだが…さつき警察の知り合に聞いたんだが、どうやら最近は誰の捜索願にも出されて無いらしくてな…」

となんとか濁そうとしているが

「要するに、俺は捨てられたんですね？」

そう聞くと孝弘は

「すまない…」

と言い頭を下げる

「孝弘さんが謝る必要はないですよ。俺もなんとなく氣づいていましたし、親の顔も思い出せませんから」

「そうか… なあ、急に言ひのりなんだが、もしよかつたら僕の養子にならないか？」

と突然の申し出に驚く

「いいんですか？俺みたいなものを養子になんとして」

「もちろん構わないわ。まあ、君が嫌でなければの話だけど」

「じゃあ、ぜひよろしくお願ひします」

「そうか、じゃあひょいと色々としなきゃいけないね。あと一応今日で退院できるけど明日までいるかい？それとも今日からつちに来るかい？」

（ふむ、AMMのこともあるからな… もしこの人しか知らないなら他の職員の手にふれる前にいつたほうがいいな）

「はい、じゃあよろしくお願ひします」

「わかつた、じゃあ準備が終わつたらよびこくねよ」

そういう孝弘は部屋を出でていった

孝弘 side

僕は零治君の病室をでると妻が待つていてくれた。

「孝弘さん、あの子どうだった？」

と心配そうに聞いてくる

「ああ、零治君は田を覚まして元気だったよ。しかも養子にもなるつて」

そう言つと妻はほつとし、喜んでいた

「でも、首の機械のことは知つていみたいたよ。そのことを聞くとほんの一瞬だけ動搖していたしね。どうやら彼は記憶を閉ざしてるんではなくて話したくないみたいだ。まあ、それもそうだと思つよ。推測だが首にあんなものを埋められたんだ、きっととても酷いことをされたんだろうね。」

僕がそう話すと妻の表情は暗くなる

「私たちじや、あの首の機械をとつてあげることはできないのよね……」

「ああ、あそこまで脊髄に近いとね、悔しいけど今の医療技術、じゃ絶対に無理だろ? ね、正直どうやつたらあんなことができるか知りたいぐらいだよ。まあなんにせよ、あんな子供にあれほどのはう道てきなことをするなんて許せない」

僕はそういうふうに手から血が流れでる。そうすると妻は僕の手をそつと握り「大丈夫ですよ。孝弘さんたとえ今、あの機械をとつてあげられなくともあの子に人並みの幸せを『与えてあげる』ことができるはずだから

ら

「ああ、そうだね」

と静かにうなずいた

「それにしても由利香をずっと待たせてしまつてるがどうしよう…」

「それなら大丈夫ですよ。さつき由利香に電話をしておきました。ついでにもしかしたら家族が増えるかもしないと言つてあげたら、電話口ですごいはしゃいでいましたよ」

「それはよかつた。君は零治君が断わらないとわかつてたのかい?」

「ええ、それは一児の子を持つ母親の勘です!」

そう自信満々に言つ妻を見て思わず笑みがこぼれた

「さて僕は、色々と手続きをしにいくよ」

そつ言つと僕は廊下を歩いていった

side out

零治と孝弘の会話から数時間後、零治は孝弘とその妻、裕子とともに

三島家に向かっていた

そして、三島家の前にきて孝弘が家の扉をあけ

「ただいまー」

と言つと奥のほうから足音が近づいてきて

「おかえりー!わたし、いい子にしてまつてたよー」

と元気よく走ってきた女の子を孝弘さんが

「えらいぞ、由利香!」

と言つながら頭を撫でる。どうやら女の子の名前は由利香といつら
しい。

「ほら、由利香。電話で言つてた新しく家族になる零治君よ。ちなみに由利香より1つ年上だからお兄さんね」

そう言い、裕子は零治を自分の娘に紹介する。

「わたしの名前は、由利香つていいます!」と元気よく挨拶をして
くる

「俺の名は、零治といつ。よろしく

「うん…よろしくね、れいじお兄ちゃん!」

と言つと勢いよく零治に抱きついてくる。それに対し零治は少し照れくさそうにする。

そんなやり取りを孝弘と裕子の2人はみて微笑んでいる。

そして零治もこれからこの温かい家庭がずっと続くと思っていた…
そう、あの事件が起つるまでは…

第8話（後書き）

いろいろとありえねえと思われますがそいつが「都合主義」で通していく下さい。

お願いします。

そして首輪付きやリリウムが入ってくるのはもう少し先になるかと思こます。

第9話（前書き）

今回からHARUにふれてきます！

そしてちよつとグロ（？）シーン的なものがあつたりなかつたりします。

零治が三嶋家の養子になつてから約2年がたちとある休日、家族皆で昼食をとつていた。

「れいじお兄ちゃん、『ご飯食べ終わつたら一緒に遊びにいひー』と元気よく言う由利香

「ああ、いいよ。ただし嫌いなトマトをちゃんと食べたらな」

「うう、がんばつて食べるもん！」

「あらあら、すっかりお兄ちゃんね」

「由利香が人懐っこいのもあるしね」

二人がその光景を見ながら微笑む。

しかし突如家の外の町内放送から緊急の避難警報が鳴り響く。

「〇〇町の皆様にお知らせします。たつた今、各国のミサイルが日本に向かつて発射されました！直ちに外に出て政府の役人の非難にしたがつてください！」

それを聞くと零治たちは、必要最低限のものを持つて急いで外に出る。すると今の放送を聞いたであろう人々が慌てていた。それをスーツを着た政府の役人と思われる人たちが指示をだしている。

「ああ、早くいこよ！」

孝弘はそう言ひつと零治の手をしつかり握り、裕子は由利香の手をしつかり握り役人の指示にしたがい移動し始める。

「れいじお兄ちゃん、いまなにがおこてるの？」

不安そうに聞いてくる由利香に対し、あいてる左手で由利香のあいてる右手をしつかり握り

「大丈夫だよ。父さんや母さん、俺もついてるからね」

そう優しく言う。すると遠くのほうから轟音がきこえる。おそらく

ミサイルが落ちたのだろう。そしてその轟音をきいた人々は、パニックに陥る。すると人の波が荒れて、零治たち家族を引き裂くかのように人がぶつかり、とうとう孝弘の左手を握っていた零治の右手が放れてしまい、由利香も裕子の右手を握っていた左手が放れてしまう。

「「零治！由利香！」」

孝弘と裕子は同時に叫び、再び手を掴もうと伸ばす。しかし人波は残酷にも孝弘と裕子を飲み込んでいき見えなくなってしまう。すると近くの建物にミサイルが落ちてくるのが見える。そしてすさまじい爆発音とともに破壊された建物の破片と衝撃が襲いかかる。零治はその衝撃にうたれ意識を落としゆくなが、絶対にこの手だけは放さないと、由利香の手をいっそう強く握った。

零治は気を失つてから、1分程で気がつく、そして意識が回復するとすぐに左手の手を握る感触に気づき多少安堵し自身の左手を見ると由利香の右手がありそのさきを確認すると…右手は腕の途中で切れていたそして先には建物の巨大な瓦礫があり下のほうには血が飛び散つていった。

しかし零治はすぐさま目の前の光景を理解できなかつた、いや、理解したくなかった零治は必死に瞬きをする。何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、しかし目の前の光景は変わることはなかつた。すると必死に否定し続けてきた事実が頭の中に入つてくる。

「あああああアアああアアあああああああアアああああアアああアアアアああああああ！」

零治は涙を流しながら叫び、じつ思つた

“たとえどんな世界だろうと、世界は常に残酷だ”

そつ思つと零治は意識を手放した。

そして零治は気がつくとまた病室のよつたな場所にいた。

「「」は？」

そう言つて近くの男性が零治が起きたことに気づいた

「「」は、どこですか？」

と男性に聞いてみる。

「「」は、昨日起きた“原因不明の爆発”によつて独りになつてしまつたりした子供たちなどを保護する施設だよ」

そう男性が言つたのを聞くと零治はふと理解する。

ようするに日本政府や他の国の政府はミサイルは約一ヶ月前に発表されたISに約半数をそしてその他は各国の軍などが打ち落としたことになり。ミサイルが落ちた事を無かつたことにしたのだ。そしてしこのことを外に漏らすとすれば消すであろうと、いわばこの施設は本当の真実を知る者の監視場所であるとそしてこの施設に日本各地で起きた“原因不明の爆発”による集められた被害者的人数はたつた16人ほどである。そしてその16人は全員子供である、子供ならあの事件のことを上手く言い包められると思つたためであると零治は理解したのだ。

「少しでも無事な人がいてよかつたよ。すまないが今忙しくてね、また後で来るよ」

と言い病室を出つてた。すると零治は最後の光景を思い出し泣くかと思えたが涙がでこなかつた。

（ははっ、俺の心は本当に狂つてゐるらしいな）

そう自分を嘲笑う。零治は前の世界で、戦争をしていて親しい仲間たちが次の瞬間には絶命してたりする状況に馴れてしまつたために心の感覚が少々麻痺しており、とても悲しい気持ちだが泣けないという状態になつてしまつてゐる。しかしそれが皮肉にもそのおかげであんな光景をみても精神が崩壊せずにするでいるのであつた。

そして零治が施設に来てから約半年後、他の子供たちとともに事ある部屋に集められていた。

「今日から君達は新しい施設に移動してもらうことになった。なので今から君達は外の車に乗って移動してもらつ」

男はそう言い子供たちはみな中から外が見えないようになつていて車に乗せられると出発する。そして車に乗つてから数分、いや數十分あるいはそれより長い時間がたち車が止まる。するとドアが開き降りされた目の前の建物をみると研究所のよつなどころだった。

そして建物中から数人男が出ると子供たち全員を中に連れて行き、とある部屋に連れてくるとそこには眼鏡をかけた研究員のような薄気味悪い男がいて、子供が全員いるのを確認するとしゃべりはじめる。

「初めてまして、僕は、I-Sの研究をしているキール・マルセスと言つ。これから君達には被検体になつてもらつよ。」

キールという男がそう言つと子供たちは騒ぎ始め、それをみたキールが部屋の隅にいた一人の男に目で合図する。するがたいのいい男が子供たちに近づき騒いでいる子供の中の一人を掴み見せしめのようにならせる。すると子供たちは怯えて静かになつた。

「うんうん、僕は静かな子は好きだよ」と薄気味悪く笑いながら言つ。

「さて、まずは男の子と女の子に別れてね。そして男の子は僕についてくるよ」「たゞ

そういう子供たちは嫌だと思ったがその言葉に従わなかつたらさつきの男の子のようになると思うと、零治と殴られた男の子を含め12人はついていった。そしてまた別の部屋に入るとまたキールが

喋りだす

「みんな最近TVとかで話題になつてているEISを知つているね？だけどねそのEISはなぜか女性にしか動かせないんだよ、現行の兵器を凌駕するのに女性しか動かせないなんてもつたいないよね～。しかし僕はね、どうにかして男性が動かせないかと考えているんだ。そしてもし動かせるようになつたら凄いことなんだ。だからね、君達にはその為に協力をしてもらつんだ。」

クククツと気持ち悪く笑うキール

「ああ、そうだそうだ、君達には拒否権は無いからね？君達は哀れなことに国から捨てられちゃつたんだから」

アハハと可笑しいように笑う。

（やっぱり、か。国は口封じのために変態科学者にモルモットとして渡したのか）

と零治は冷静に考えていた。すると笑い終わったキールが零治のことみて
「そういうや、そこそこいる零治君だつたかな？君面白いもの首につけてるよね？」

「つ！」

「どこの誰がそんなものをつけたのかわからないけど、僕はそれに興味があるんだ」

口の両端を上げてにやりと笑うキール

「ちよつと調べさせてもらつよ、大丈夫解剖は絶対もしないし丁重に扱うから、乱暴に扱つて貴重なサンプルが使い物にならなくなつたらいやだもん」

零治は近くにいた大柄の男一人に掴まれ抵抗するが体格差が違いますぎるためにあつさり押さえ込まれる。そして実験室のような場所につれてこられる。するとそこには組みかけのEISと呼ばれるものがあつた。

「来てそろそろ悪いけどすぐに実験させてもうつよ。さつそくEISを動かせるか試してみたいけどまずそれがどうなつてるかを知り

たいからね

そう言つと零治を台上に固定して機械からこべつも伸びるコードの中の一つをAMSにとりつなげる。

「すこし苦しいかもしないけど頑張つてね~」

そう言つと零治はネクストを動かすためにつなげたときよりは軽いが似たような精神負荷をつけ

「がつ!」と苦しそうにする。

「う~ん、どうやら脳からの電気信号を首のそれで制御して機械とかに送りだすみたいだね。これは義手や義足のために使われるものだつたのかな~? それにしても精神負荷がかかるみたいだね。ねえねえ君はなんでこんなものをつけられたんだい?」

「知る、か!」

「そうか、残念だ。まあそれじゃあ仕方ないか、悪いけど君にはその首のものと似たようなものができるまで頑張つてもうからよろしくね」

その日から零治は辛い実験の日々を繰り返す。

そして実験を始めてから約1ヶ月半後

「ねえねえ零治君、今日はねEISを動かしてもらいたいんだ~、君のね首と同じようなものがね試作品だけできたから、まずは君がEISを動かせるか試してみたいんだ。もしかしたらいつもより精神に負荷がかかつちゃうかもしれないからがんばつてね?」

そう言つと零治をEISに乗せEISから伸びるコードを首に刺す。すると精神負荷がかかり苦痛そうに表情を歪めた。するとEISが起動したのだ。キールはそれを見て

「すごいよ、零治君!」

アハハと愉快そうに笑う

「本当に凄いよ君は！今、IS適正を見たけどA+だよー。せっかく他の子に取り付けてあげなきや」

そう言いつとキールはモニター室を飛び出していった。

そしてその日から零治は生身でもISでも戦闘訓練を強いられ、他の子供は擬似的AMUをつけられ精神負荷に耐えられるようにされた。それでいつた。そしてそこから1ヶ月ほどたつた。

とある研究室で

「やつぱりす」にな、僕は！まあ大きさが首輪と同じぐらいになつてしまつたが、男性はISが使えるようになり元々IS適正のある女性は1～2ランク上がるようになる

と一人で興奮しだすキール

「ううん、でもまだ改良しなきやな、残念なことに精神負荷に耐え切れなくなつた子供たちがでちゃつたし、あと2人しか使えるのがいなのはつらいなー。だけど零治君はすこいね、あの精神負荷にずっと耐えてるんだから。」

そして急に立ち上がり

「あつ、そうだ！前に拾つてきたあのISみたいなのを零治君に動かしてもらおう！あの子なら僕らでもISっぽい何かとしかわからなかつたあれを動かせるかもしれないしね、やつぱり僕は天才だ！」

そう言いつと実験室に向かつていつた。

「零治君、君に動かしてもらいたいものがあるんだ」

そう言いつと零治の前にあるものが出された

「前になそのISっぽいものを拾つたんだけどね僕ら研究員がどんなに頑張つても解析もできなくて女性にも触らせてみたけどまったく

く反応しないんだ、外見からしておそらくHSだと思つんだ。だから是非、君に動かせるかを試してもらいたいんだよ」
零治はそのHSらしきものをみるとどどいかで見た記憶があるのだ、そして少し考えるとふと思いつく。

(「いづま、まさか…）

零治は自分の勘が正しければ、自分は「いつを動かせるんではないかと。そう思うと零治はそのHSらしきものにふれる。するとAMSをつなげてないのにHSが起動した。すると機体の情報が零治に流れ込んでくる。

AC・NAME *f antasma*
ファンタスマ

HEAD・HD・HOGIRE
CORE・CR・HOGIRE
ARMS・03・AALIYAH/A
LEGS・LG・LANCEL

R ARM UNIT・03・MOTORCOBRA
L ARM UNIT・07・MOONLIGHT
R BACK UNIT・EC・0307AB
L BACK UNIT・EC・0307AB
R HANGER UNIT・EB・0600

- COMPLETE SYSTEM CHECK -

システムチェック完了の情報まで流れ込み、それが終わる。
(「どうやら、ネクストの出力をほぼ完璧に再現してある。そしてPAも機能するとは驚いた。だがPAは展開しないほうがいいな）
そう考えてみるとキールが

「マジKOOI-最高だよ零治君！」

などと五月蠅いが気にせず。ファンタズマのそれなりに情報をよみとると零治は研究員達の方へ向き右手の03-MOTORCOBR Aをガラス越しにいる研究員にむけて撃つがガラスは壊せなかつた
「おや～？今までの恨みをはらそうとしてるのかい？だけど残念だつたね～、このガラスは対IIS用のバリアがはつてあるから無理だよ」

とケラケラ笑うが零治は左手の07-MOONLIGHTを最高出力でガラスの目の前にいた他の研究員2人ごと焼き切ると、警報がなる。そしていつも人を馬鹿にしたように笑っているキールが慌っていた。

「な、なんでIS用のバリアを壊せるんだ！？クソッ！」
そう言つと急いで部屋をでて応援を呼ぶキールそれを逃がさないと
07-MOONLIGHTで壁を壊していく。

「さて、今までの礼をたっぷりとおめでてもう少し」

と/orい研究員を殺害しながら追いかけると外に出た
するとキールはへばつていき転んでしまう。そして零治は近づく

「貴様は、せんざん俺のことを好き勝手にしてくれたな！」

「だからどうした？それで僕を殺して他の世話を救ってからだつたら無理だな！他のやつらは精神負荷に耐えられなかつたからな！残りの2人はちょっと手を加えてやつてもう無理だ！」ヒヤヒヤヒヤと狂つた女がこ笑う。それを聞いて零台は

「五月蠅い」

と言いキールに対しても3-MOTOR COBRAを撃つと片足が吹き飛ぶ

と書いてのた打ち回る

「もういい、貴様は今すぐ殺してやるつ……！」

そう言い03-MOTOR COBRAをキールに向けると横から斬りかかられると零治は後ろに避け距離をとり、攻撃してきた相手を

見た。するとそこにはISをまとっているものが2人いた

「ははは！ もうお前は終わりだあ！ 見る、さつき言つていた残りの2人だよもう廃人確定の人形だよ！ さあ、お前たちあいつを殺せ！」

そう言つと2人は零治むかって近接ブレードで切りかかつてくる

「下種がつ！」

そう言いキールを睨みながら相手の攻撃を避ける。相手は素人同然の動きで力任せに振るうブレードは決して零治にあたらないだが零治は反撃をしないでいた。たとえ手遅れだとわかつても2人を手にかけたくないと思っている。すると2人からオープン・チャネルでしゃべつてくる。

「オレタチハ、モウタスカラナイ」

「コレイジヨウハ、モウイヤダ」

「ダカラモウ、コロシテ」

それを聞くと零治は

「…わかった、そしてすまない。俺のことは恨んでくれて構わない」

そう言つと07-MOONLIGHTで絶対防護を貫き2人を倒す。そして2人とも切られる前に「アリガトウ」と言い残した。

そして再びキールの元へ近づくと

「クソッ！ あの役立たずどもめ！」

そう言つキールに03-MOTORCOBRAをむけ

「死ね」

そう短く言い引き金を引いた。そして

「こんな場所はもうあるべきではない」

そう言つてある程度の高さまで上昇し、両背のEC-0307ABを高出力で研究所に向けて撃つと研究所を跡形もなくすべて吹き飛ばした。そして、静かに地上に下りるとファンタズマを解除すると左手に腕輪状になつた。そして零治は今までの疲労のせいか、膝をつき倒れてしまう。

すると遠くからヘリコプター車の音が近づいてきて、ヘリコプターが近くに着陸して中から初老の男性が降り零治に近づいてくる。そして零治はその姿をみながりゅうひとつ意識を手放した。

第9話（後書き）

まあ、なんというか、『都合主義まつじぐらなつべ』に無理やり感が
はんぱないですがそこいら辺はスルーでお願いします（汗）

そしてもうすぐHARU本編に入れそうです。
なので頑張りさせていただきます！

第10話（前書き）

今回は短いと思こます。

そして次から本格的に本編に入れる予定となつております。

とあるヘリコプターの中

零治はゆっくりと目を開け

「また気を失ったのか…」

と静かに咳く。それに気づいた初老の男性は

「おや？ もう目を覚ますとは丈夫な子だな。私の名はルーカス・レイレナードという。一応外傷は無かったがどこか痛むところはあるかな？」

「いえ、大丈夫です。俺の名は三嶋 零治です。そして助けてくれて、ありがとうございます。」

「いや、礼を言うのはこちらだ。生きていてくれてありがとうございます。」

そして、すまない

零治はむこうの急な感謝と謝罪にとまどった

「なぜ、そんなことを言つんですか？」

「実はあそこの研究所が非人道べきな実験をしているのがほぼ確実にわかつっていたんだが、決定的な証拠を入手できずに突入することができずにしてな。そして今日になってクラッキングでやつと入手ができ急いで来てみたが、それは遅すぎた。結果、君の手を汚してしまい他の子供を誰一人として救うことができなかつた」

「でも、国が関係していますから、仕方ないと私は思いますよ」

「それでもだ。少し無理してでも早く行くべきだった…すまない」

「いえ、少なくとも俺は許しますよ。なにはどうあれあなたが俺の命の恩人ということに關しては変わらないんですから」

「ありがとう、優しいんだな君は。罪滅ぼしと言つてはなんだが、君を我が社で保護させてもらえないか？」

「保護、ですか？」

「まあ今の君の状況では、私が例えどんな理由を述べようと、君は私達があの研究員達のようにIRSが使える男性として利用すると思うのは承知だ。そのうえで君を保護させてもらいたい」

「確かにそうですね、ですけど俺は普通の生活に戻るのが難しい今、頼るしかないのが事実ですから」

「そんなことはない！君は普通に生活していいんだ、今からでも遅くは無いんだ！」

今まで冷静だつたルーカスが急に声を大きくして言つ。その光景を見て零治は思わず軽く笑つてしまつ。

「やつぱり、あなたはいい人ですよ」

零治がそう言つとルーカスは、はつと冷静に戻りと笑つ

「ハツハツハツ！私もしてやられたな、こんな子供にのせられてしまつたよ」

「では、これからよろしくお願ひします」

「ああ、任せてくれ。一応君がIRSを動かせる事は我が社の職員全員で外部に漏らさないようにするがいいか？」

「そのかたちでお願いします」

そう話しているとヘリが着陸し外に出ると田の前には見覚えのあるマークが入つたでかい建物があつた。

「見てくれこれが我が社、レイレナード社だ。そして、よつこやレイレナード社へ

それを零治はみて啞然としていた。

（あれ？やつぱり名前を聞いたときから思つたけど、マークまで

一緒とは驚きが隠せん）

「ん？どうした、そんなに驚いたか？」

そう言わはつと我にかえる

「え、ええ。あまりの大きさに驚いてたので」

「そうか、だが IIS が発表されてから業績が落ちてきてな」

「俺も手伝いますよ？」

「ハツハツハツ！ 気持ちだけ受け取つておひづ。ではついて来てくれる」

そういう歩き出すルーカス、そしてその後に零治はついていった。

こうして零治はレイレナード社に入社（？）したのである。

そして、あれから 3ヶ月ほどたち零治は社内のみんなから可愛がられていた。零治もまんざらではないがどうしても手伝いと思つていた。しかし社内の皆はあの実験の被害者だからと気遣い IIS 関連の仕事は手伝わせないようにしていた。だが零治からすると恩返しができないのがもどかしかつた。そこで零治はルーカスに仕事をどうしても手伝いたいとしつこく頼み込むと、とうとうルーカスは折れてしまい無茶はしないようこと条件付で承諾を出した。

すると零治は自身の IIS ファンタズマを調べることにした、さすがにコジマが書があるかないかは IIS のみの情報では判断がつかず、精密に調べると、どうやらコジマ粒子は害をなさないようになつていた。そしてブースター や PA はネクストと同じ出力であり背中の EC - O307AB も数値をみるとネクストのとき（Ver. フロムマジック）と変わらず AA も同じだった。

武器のほうは両腕に 07 - MOONLIGHT を装備した状態で持てるようになつていた。

そして格納されている武装は 32 個と多いのである。これはあまりにも危険だろうと思い、PA、AA、ブースター、EC - O307A B、07 - MOONLIGHT の出力には制限をかけたのであたつ

た。

そして零治はまず開発から手伝おうと思つと、零治は向こうでの知識がある程度使いいろいろと助言をしていく。しかし皆、最初は子供の戯言だと思っていたがその有用性がわかると驚き零治の助言とともに一緒に開発していく。そして零治がレイレナード社で手伝うようになつてから徐々に業績が伸び始めたのである。

それから時はたち、零治が高校1年になるころに前から患つていた持病にルーカスが倒れてしまつ。それを聞き急いで病院に向かう零治

「爺さん大丈夫か！？」

「ああ、零治か。学校はどうした？」

「爺さんが心配だから早退してきたさ。で、医者はなんだつて？」

「病の進行が思つたよりも早くてもひ、長くないと言つてた。長くもつて一ヶ月だそうだ」

「… そうか」

「なに、私もうすうす感づいてたことだ。それにしても改めて見ると随分と大きくなつたなあ」

「あれから何年たつてると想つてんだ？」
と笑いながら言う

「そうだつたなあ。なあ、といひで零治

「ん？ なんかい爺さん」

「お前、次の社長を任せていいか？」

「はあ！？ なに言つてんだよ爺さん、俺なんかよりヨーリカさんとか大介さんとかいるだろ？」

「ああ、その2人にも社長にならんかと聞いたら零治を指名した

ぞ、他の社員たちにも聞いたら皆お前さんがいって言つてたぞ。因みに私もそれを望んでるぞ」

「みんな、買いかぶりすぎだよ、俺のこと」

その言葉をルーカスは聞くと大きな溜息をつく

「はあ～、お前は自分のことを過小評価しそうだ。もつと自身を持つて、お前にはそれに見合うだけの能力があるのでから。まあ死にそうな年寄りの最後の我慢を聞いてはくれんかね？」

それを聞くと零治は拳を強く握り。

「わかつたよ、爺さん。だけど爺さんには悪いが、あと1年程待つてくれ。俺はその間にもつとがんばるから、それじゃ駄目か？」

「ああ、それで構わない。こんな年寄りの我慢を押し付けてすまんな」

「気にしないでくれ、爺さん」

そのあと零治とルーカスは他愛のない話をして一寸をすゞしていった。

そして、その日から一週間と数日たつとルーカスはとうとう帰らぬ人となつた。

零治は涙を静かに流し見送る。そして自身が言つた言葉を果たすために努力をするのであつた。

時は過ぎ、翌年の2月、世界中を騒がせる出来事が起まる。

“男性初のIIS操縦者が表れる”

第10話（後書き）

やつとHIS本編の一歩手前です。
そして終わり方が微妙なのもいつものこと、とこひこでお願いします（汗）

今回もいろいろ都合主義でとおします。
一応、零治のHISの武装は設定などだすことになります。

あと因みにでてきたレイレナード社の皆さんはとても心が綺麗な人達なので、ご安心してください。

どのぐらい綺麗かと言つと、アクアビットの研究員達が
「「ジマなんて害のあるものを使つてはいけないんだ！」
と言つてはいるのです。

そして次も頑張つていきたいと思います。

誰も得しない主人公設定的な何か（前書き）

一応、本編突入前なので主人公設定的な

誰も得しない主人公設定的な何か

誰も得しない主人公設定的ななにか

名前：三嶋（久瀬） 零治

原作開始時は高校2年

背の高さは185ぐらい

IS名：ファンタズマ

形みたなの

HEAD - HD - HOGIRE
CORE - CR - HOGIRE
ARMS - 03 - AALIYAH / A
LEGS - LG - LANCEL

R BACK UNIT - EC - 0307AB
L BACK UNIT - EC - 0307AB

をフルスキンではなく都合よくハーフスキンにしたもの

機体武装

ライフル

051ANNR × 2

アサルトライフル

063ANAR × 2

MR - R102 × 2

04 - MARVE × 2	スナイパー・ライフル
050ANSR	
061ABSR	
マシンガン	
XMG - A030 × 2	
03 - MOTOCOBRA × 2	ガトリングガン
GANO1 - SS - WG × 2	
ショットガン	
MBURUCUYA × 2	
SAMPAGUITA × 2	
ハンドガン	
LARE × 2	グレネード
GRA - TRAVERS × 2	レールガン
RG01 - PITONE	レーザーライフル
ER - 0705	ハイレーザーライフル
HLR01 - CANOPUS	パルスガン
HLR09 - BECRUX	
EG - 0703 × 2	ブレード
KIKU × 2	レーザーブレード
07 - MOONLIGHT × 2	あと天使砲(フロムマジック使用)

他、首輪付きのとかもそのうち追加予定

誰も得しない主人公設定的な何か（後書き）

ぶつちやけ形はビジュアル使用なのでゲームで参考にしないほうがいいと思われます。（汗）
そして天使砲の威力はフロムマジックと同じで考へるとともでもないきが…

あと機体性能は超スペックということでお願いします。

第1-1話（前書き）

やつと本編突入です。
長かった、なあ。

そういえばほほどうでもこことですがアサルトライフルやライフルの連射速度もフローラマジックドローと同じくらいを忘れてました。

第11話

IS学園の1年1組の教室で真ん中の最前列に織斑一夏といつ男の子が座っている。

「全員揃つてますねー。それじゃあSHRをはじめますよー」

そう言つるのは子供が大人の服を無理に着ましたといつ印象の女性、

山田麻耶先生である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「……」

しかし教室内は変な緊張感から生徒の反応が誰一人として無い。それに対して山田先生はちょっとうつむいてしまう。

「じゃ、じゃあ自己紹介を出席番号順でお願いします」

と言つて自己紹介が始まつていぐ。そんな中、織斑一夏は別のことを考えていた。

（これは……想像以上にきつい……）

と考えていた。それもそのはず、クラスの殆どが女子であるために数少ない男子にみな注目しているのだ。そして一夏はちらりと窓側の女子、六年ぶりの再会である幼馴染の篠ノ乃篠の方へ助けを求めるようにして目をやるが、ふいつと窓の外に顔をそらした。

（うう、薄情な……）

そう思い他に助けを求めるようとしてもあともいるのは、後ろにいる男子生徒だけであるが、今の状況では後ろに振り向くことはできなくて悩んでいると

「…………くん。織斑一夏くんつ」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で呼ばれて声が裏返ってしまった。周りからはくすぐすと笑い声がする。

「あつ、あの、お、大声出しちゃつて」「ごめんね。お、怒つてる?」「メンね、『メンね!』でも、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今“お”の織斑くんなんだよね。じ、自己紹介してくれるかな?だ、ダメかな?」

「いや、あの、そんなに謝らなくても… つていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本ですか? や、約束ですよ。絶対ですよ!」

そう聞くと一夏はしつかりと立つて、後ろを振り向く。

(うう…)

「えつと… お、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

そう言うと周りの生徒からは、それだけで終わり? もつと色々と喋つてよ! などという期待の視線がつきかかる。すると一夏は決心したように深呼吸して思い切つて口にした。

「以上です」

そう言うとがたつとずつ口けてしまつた女子が何人かいた。するとパンツ! 後ろからいきなり叩かれおそるおそる後ろを振り向いてみると、とある人物が目に入り。

「げえつ、関羽! ?」

と言うとパンツ! とまた叩かれる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

一夏の頭を叩きそう言う人物は織斑千冬である。

「山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえ副担任ですから、これくらいはしないと…」

山田先生はそう言ひさつきの涙声とは変わり笑顔でこたえた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことはよく聞き、理解しろ。逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな」

千冬がそう言うと

「キヤ——————！本物の千冬様よ。」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に会うために沖縄から来ました！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

などと黄色い声援が響く

「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。で？挨拶も満

足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は「パンツ！」

「織斑先生と呼べ」

「…はい、織斑先生」

「よし、他のものも静かにしろ。次のやつ自己紹介をしろ」

そう言つと一夏の後ろの男子が立ち上がる。

s i d e 首輪付き

どうも、全く出番がなかつた首輪付きです。え？あの後どうなつたかって？それはまた今度話すとして、俺は約一ヶ月前にこの世界に来て右左もわからず途方に暮れて2日ほど過ごしてたらとうとう空腹で倒たんだ。そのところを織斑千冬に助けてもらい、なんか俺の手首についてるアクセサリーがIISというものらしく俺はそれを使えるがためにここにいるわけだ。もちろん自分の素性のことは殆ど隠して首の後ろのAMSのことを利用して実験施設から逃げてきたことにした。そしてなんか織斑千冬が根回してくれたみたいで政府のほうに正式に登録された。

それにもしても周りの声がでかすぎるだろ。お、そう思つてたら皿口紹介の番が回ってきたみたいだな。

「あー、俺の名はオルカ・リンクスだ。一応 I.D. を使える二人目の男子だ。テレビに出てないけど、政府の方にはちゃんと登録してあるからよろしく。趣味は特に無い。まあ、そんなもんで」と俺が言つと周りがまた騒ぎ始める。あくめんどくさかった。え? 名前が安直すぎる? . . . h a c k のオルカもといヤスヒ「とコニー君のバナージの名前を馬鹿にするなよ? パアンツ!

「いつ!」

「お前もまともに自己紹介ができるのか?」

「…すみません」

なぜあの自己紹介ではいけなかつたのだらつ…

side out

そして自己紹介が進み一人の女子にあたる

side ある女子

私の名前はリリウム・ショリーと言います。珍しいことに私は生まれたときから前世の記憶がります。名前のリリウムは一緒にアミリネームは変わりました。そして前世の世界は戦争が当たり前の世界でした。そしての人も死んでしまった悲しい記憶もあります… つと暗い話は無しにしましよう。前世のことはいつか語ると思います。で、あのオルカ・リンクスと名乗った男子は前世のストレイドのリンクスに瓜二つですね、もしかしての人もそうなんでしょうか? 後で話してみましょう。それにしてもあの出席簿とても痛そう… 私は叩かれないように気をつけなきゃ。あ、どうやら私の番のようですな。

「私の名前はリリウム・ショリーです。趣味は読書で、好きな食

べ物はスイーツ全般です。日本にはつい最近来たばかりなので色々と教えてもらえると嬉しいです。一年間よろしくお願ひします」
そう私が言い終わり次々と進み全員の自己紹介がちょうど終わると、教室のドアが開き制服をきた男子が入ってきました。それは約一週間前にテレビに出てきて、そして私の前世の記憶でとても見覚えのある人でした。

side out

一組の自己紹介が終わると教室のドアが開く、すると男子生徒が入ってくる。

「遅れてしません、織斑先生」
「大丈夫だ、事前に連絡はもらつてある」
「そうですか。ならよかつたです」
「ちょうどいい、お前も自己紹介しろ」
「わかりました。」

そう言つと男子生徒はクラス皆の方を向いた

side 零治

俺は織斑一夏がISを使えると発表したのを見てから、約2週間後、3月の初めに政府のほうへISが使えることを報告した。そして俺がレイレナード社の社長へと就任すると同時に発表して欲しいと頼み約一週間前に発表された。そして入学式当日、俺はIS学園の

理事長室で少し話をしたためにS H Rに遅れてしまい、最後のほうに来た。どうやら自己紹介が行われているみたいだな、では入らせてもらおう。

そしてドアを開けたて織斑先生に謝罪などと言つと自己紹介をすることになった。なので真ん中のほうに行きクラスメイトを見渡すと、向こうの世界で見覚えがあるのが2人ほどいて驚いた。そして2人のほうを見ると、向こうも驚いていた。どうやら十中八九あたりだろう。そう思うと自己紹介を始める。

「始めてまして、多分テレビや新聞をみて知っている人はいるだろう。俺の名は三島零治で本当は今年で高校二年になるんだがあまり気にしないで接してくれると助かる。趣味は特に決まつたものは無いが暇なときは読書をしている。もし質問があるなら後で聞いてくれ。一年間よろしく頼む」

そう言い終わると

「キャー！うちのクラスに男子が三人も、さらにみんなイケメン！」

「そして年上キター！」

「神様ありがとう！」

なぜこんな騒ぐんだ？俺の自己紹介に変なところでもあつただろうか？

まあいいか、とりあえず後で見覚えのあるやつには接触をしてみるか

side out

零治は自己紹介が終わり一夏の左隣の席に着くがクラスはずつと騒いでいる。するとチャイムが鳴った。

「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからEISの基礎知識を半月で覚えてもらおう。その後実習だが基本動作は半月で染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事しろ」

そして一時間目が終わり、休み時間

一夏は近くの男子2人に話しかけていた

「な、なあ」

「「ん?」」

「い、いや、男子が俺たちしかいなーから仲良くしようぜって思つて」

「ああ、そういうばそつだつたな。改めて自己紹介させてもいいが、三嶋零治だ年上だとか関係なく接してもらえると助かる。呼び方は好きに呼んでくれ」

「あー、俺の名はオルカ・リンクスだ。オルカでもリンクスでも好きなほうでよろしく」

「おう。俺は織斑一夏だ一夏つて呼んでくれ。零治、オルカ」

そう話していると

「…ちよつといいか

と筈が話しかけてくる

「「「ん?」」

「誰かに用か?」

「ああ、ちよつとそこの」

と言いながら一夏の方をみる筈

「一夏、どうやら」指名のよつだ

「おう、悪いちよつといつてくる

そう言つと一夏は筈とともに教室からでていく

(ふむ、では俺も聞いてみるかな)

そう思うと零治はオルカに聞こえる程度に小さく

「首輪付き、リンクス」

そう、ぼそつと咳くとオルカは

「一やつぱり、あんたか」

一瞬驚くと納得したようであった

「久しいな、首輪付き。それにしてもその名は安直すぎやしないか？」

「どうさに思い浮かんだ名前がこれだつたから仕方ないだひつ。ていうかあんたの名はどうなんだよ」

「俺は苗字は違うが零治というのは本名だぞ。因みにお前はいつじみじみにちに来たんだ？」

「一ヶ月ぐらい前かな、あんたは？」

「もう十一一年ぐらいかな？」

「12年前！？随分早いな」

「そうでもないさ、で話は変わるがあの後どうなつた？」

「成功したよ…」

その言葉を聞くと零治は

「そうか」

と納得したように短く言つた。するとチャイムが鳴り一夏達が帰つてくる。

「まあ、つもる話はまた後にしよう」

「ああ、そうするか」

こうして一時間田の休み時間は終わる。

一方リリウムのほうは聞きに行こうかどうじよつかと悩んでいたらいつの間にか終わりのチャイムが鳴つてしまつていたのであつた。（うー、次の休み時間は必ず聞いてみせますー！）

と心中でガツツポーズをとるのであつた。

そして一時間田の途中

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

と山田先生が訊いてきた

「あ、えつと…」

「わからな」というがあつたあら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

と胸を張りそつと一夏が元気に

「先生！」

と言い、山田先生も

「はい、織斑くん！」

とやる気に満ちた返事で返す。

「ほとんど全部わかりません」

「え…。ぜ、全部、ですか…？」

「…織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

と言つとオルカが

「ハハハッ！古い、古い電話帳と、間違えて」

と一夏のこたえがつぼつたらしく笑う。すると

パンツ！パンツ！

と一夏とオルカの頭に出席簿が落ちる。

「リンクス静かにしる。そして織斑、必読と書いてあつただらうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間での分厚さはちょっと…」

「やれと言つている」

「…はい。やります」

そしてなんとか授業は進み一時間の休み時間

「ちよつとよろしくて?」

と金髪の女子が偉そうに話しかけてくるが一夏たちは気に

せう話しこる

「ルルル」

そつまた話しかけるが一夏（一夏は本当に氣づいてこな）達は話している。

「無視しないでくださいます?」

と言つてきたそれに対し

「？」と一覧表

「はあ…」と零治は溜息をつく。そしてオルカは「やれやれ、空氣にもなれんか」と語り

するど皿の前の金髪はむねをとらひぐ顔をあける。

けでも光榮なのに、なんなんですかその態度?」

悪いな。俺、君が誰か知らないし

「私を知らない？このセシリ亞・オルゴットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「あ、質問いいか?」

卷之三

(貴族の務めか、レオハルトやジエラルドのほうがましだつたな)

「代表候補生ってなに？」

それを置いて零治が説明する

トみたいなものだ

そう言つとセシリアははずつこけそつになつていった体を持ち直し

びしつと話をきして言ひ、続けて

「…あなたたち、馬鹿にしていますの？」

(((お前が幸運だつて言つたんぢやないか)))

と見事に三人とも息がぴつたりになつた瞬間である。

「まったくあなた達は男でIRSを操縦できると聞いていましたから、少しひくら期待していたのに、まったくもつて期待はずれですわね」

「俺に期待されても困るんだが」

「確かに一夏に期待するのは間違つていいな」

とオルカが言い

「まあ、参考書を古い電話帳と間違えて捨てるぐらいだから」と零治も言つ

「お前らーそんな馬鹿にしなくてもいいぢやないか！」

そんなコントみたいなことをしているとセシリ亞が咳払いをし

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

(こんなやつの優しさを貰うんだつたらバファリンの半分を貰つたほうがずっといいよな)

とオルカはくだらないことを考えている。

「IRSのことであれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試では唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから」

「入試つて、あれか？IRSを動かして戦うやつなら俺も倒したぞ、教官」と一夏

「ああ、あれか？俺も倒したなあ」とオルカ

「残念ながら俺は無かつたぞ」と零治

三人がそう言つと、セシリ亞は驚いている

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子だけではつておちじやないのか？」

そう言つとセシリ亞からはピシッと亀裂の入るような音がした

「あなた！あなたがた2人も教官を倒したつて言つの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「一夏、たぶんつて？」

「いや～、だから、たぶん倒した」

「たぶん！？たぶんつてどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けつて。な？」

「これが落ち着いていられ

「

とそこで三時間目のチャイムが鳴る

「つ……またあとで来ますわ！逃げなうことね～よくつて～？」

とこうセシリ亞の言葉に対し零治たちは

（（（これは、面倒なことになつた）））

と思つていた。

一方リリウムは

（うう～今度こそはと思つたのに、セシリ亞・オルコットって言う人に先を越されて話せなかつたです…）

と机の上にうなだれていたのだった。

第1-1話（後書き）

やつと本編に入ったんですがたぶんこれからリアルの用事が忙しくなり更新速度が落ちてくるかもしません。本当に申し訳ないです。一応、はやめに投稿していくつもりでいるので、どうぞよろしくお願いします。三（一一；）三

今回も頑張ったお！

てこつわけどどんわ

二時間田の授業

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と一、二時間田とは変わり、千冬が教壇で説明しようとしている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

そう、ふと思いついたかのように千冬が言い、ちらり

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな」と簡単な説明を付け加える。すると女子数名が

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

と一夏を推薦する。

「では候補者は織斑一夏…他にはいないか?自薦他薦は問わないぞ」

そう千冬が言つてみると

「お、俺!？」

一夏がつい立ち上がりてしまつ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか?いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待つた!俺はそんなのやらな

そう一夏が言いかけるが千冬の

「自薦他薦は問わないと言つた。他薦されたものに拒否権など無

い

という言葉にぱぱり切り切られてしまつ。すると一夏は苦し紛れに

「じゃあ、オルカを推薦します！」

と言つた。それを聞きオルカは

「また、一夏。おれを巻き込むな！俺はやうんぞー。」

思わず立ち上がりそう言つが

「リンクス。邪魔だ、席に着け。それと拒否権は無こと言つたはずだ」

と一蹴されてしまつ。するとオルカは零治のほうを見るとニヤリと笑い

「じゃあ、零治を推薦します！」

そう発言するのであつたが零治は依然として涼しい顔をしている。

「他にはいなか？いなーならこの三人の中から選ぶぞ」

千冬がそう言つと、セシリ亞が机をバンッと机をたたき立ち上がる
「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされでは困ります！わたくしはこのような島国までIIS技術の修練に来ているのであつて、サークスをする気は毛頭ございませんわ！」

というのを聞いて

（ほう、よくもまあ、あの歳であんだけ長いセリフを咬まことに喋れるな）

と内容のほうは興味無しの戯言と思い別のところを感じする零治。

「一夏。お前、猿だつてよ」

「いやいや、オルカのことだろ？」

とオルカと一夏はヒソヒソ話す。

そしてセシリ亞はさらに言葉を続けて

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそ

れはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしことつては耐え難い苦痛で、そこでカチンとこうよつた音がすると

「イギリスだって大したお国ではないだろ。世界一まあい料理で

何年覇者だよ」

と一夏が頭にきて思わず反論してしまつ。

「なつ……！？」

と、セシリアは顔を真つ赤にして怒つてゐる。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

そう言つてセシリアにたいして零治は軽く溜め息をつき

「はあ、先に日本は文化として後進的などと言つて侮辱してきたのはそちらのほうではないか？それなのに自分が被害者面とは、まったくもつて情けないな。代表候補生の名がきいてあきれのまつたくもつて、」

「代表候補生の名がきいてあきれのまつたくもつて、」

「おう、いこや。四の五の言つよつわかりやすい」と意氣込む一夏。

「決闘ですわ！」

と言い机をパンツと叩くセシリア。

（言ひ返せなくなつたからつてそれは無いんじやない？）と思つ

オルカ。

（やれやれ、上手くいかなくなると暴力で解決しようなどとは情けない。まあ、力ずくでやるならこいつらも同じやり方でやらせてもらうだけだが）と思つ零治。

「おう、いこや。四の五の言つよつわかりやすい」と意氣込む一夏。

「言ひておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使

い、いえ、奴隸にしますわよ」

そう言ひ敵意をむけた目で睨むセシリアを見て一夏は

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐つちゃいない」と言つ

「そう? 何にせよちょっといいですわ。イギリスの代表候補生、セシリ亞・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね!」と威張るセシリ亞。

「ハンデはどのぐらいつける?」

一夏は男が本気で女子と力比べしたらまずいだらつと思いつつも、そう聞くが

「あら、早速お願いかしら?」

とセシリ亞は嘲笑うかのように言つた。

「いや、俺がどのぐらいハンデをつけたらいいのかなーと」

そう言うとクラスからドツと爆笑が巻き起つた。

「お、織斑くん、それ本気で言つてるの?」

「男が女より強かつたのって、大昔の話だよ?」

「織斑くんたちは、それは確かにIS使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

「しかも、もし男女間で戦争が起きたら男性陣は三日と持たないと言つてるんだよ」

と、みんな本気で笑つてゐる。すると零治が口をゆつくり開く

「やれやれ、女性はISが使って強から偉いとは、くだらんな。男女間で戦争をしたら確實に負ける? 確かに、戦力だけでみれば負けるだらう。まあ、第一に貴様らは戦争と言うもの勘違いしてると思つた。戦争と言うのは、ただ正面からどうどうとぶつかり合つような、おまま」とではない。そこの君」と言い、適当な女子を指差し

「君に守りたい家族や友人、親しいものはいるか?」

そう問うと

「は、はい。います」

「では、君が国家代表やトップレベルの実力をもつ専用気持ちのIS操縦者としよう。だが、もしも君の守りたい人が男性陣に人質としてとられ、助けるには女性陣と敵対して殺さなきゃいけないと

言われたら君は女性陣の勝利のために人質を見捨てるかな?」

「そ、それは…」

と零治の問いに答えることができない女子に構わず喋りだす

「そして戦争というのは、人質をとつたり暗殺など当たり前だ、とくに死に物狂いでもがくやつらは、どんなことをするかすらわからない。そして君たちは誰一人として死なずに戦争が終わるとでも思ってるのか?」

そう言うと別の女子が

「でも、I-Sの力をもつてすればできるんじゃ」

と言つてくる。しかし零治はさらに問いかける

「いや無理だな、それはほぼ絶対といつていいほどありえない。戦争は始まつたら死人がでる。たとえ戦地にいなくともな。そして、君たちは最前線にたつたとき田の前の相手を殺せるか?」

それを聞くと皆黙つてしまつ。

「人類は古来から今日まで多くの戦争があつた。そしてその戦場に立つものは相手を殺し、殺した者の家族や親しい者から死ぬまで恨まれ続ける。たとえ自分は直接手を掛けなくてもそんな言い訳は通用しない。殺された側の人間は殺した側全員を同じように恨むだろう。そして君たちは殺した側にたつたとき、それを背負えるのか? 戦争と言うのはそういうものだ」

そう言うとクラスの皆は少し想像したのだろうか、さつきまでの笑つていた雰囲気が消えていて、零治の話に集中している。

「そして現在の女尊男卑は今まで男尊女卑の時代を続けた愚か者のしつけ返しだろう、だが女尊男卑を男尊女卑の時のようにぐだらない理由でこのまま続ければ、やがて人類は壊死するだろうな…つとすまない。話が随分と脱線してしまつたな。まあ、今までの頭の片隅にでも置いといてくれればいい。だが、君たちが使うI-Sと言つるのは条約で禁止されているが、普通に人を殺せてしまう”兵

器”だ。たとえ物を切るためのカッターだつて使うやつが使えれば、人殺しの道具になる。つまりISはそういうことなんだ。君たちには、それだけは覚えておいて欲しい。長々すまなかつたな

そう言つとしばしの沈黙が流れる。そしてその沈黙の中、千冬がきりだす。

「三嶋の言つとおり、ISはあくまでも“兵器”だそのことはしつかり覚えて置け。さて話がうやむやになりそつだつたから戻すが、クラス代表の件は織斑、リンクス、三嶋、オルコットの四人で一週間後の月曜。放課後第三アリーナで行つ。四人はそれぞれ準備して置くように。それでは授業を始める」

ぱんと手を打つて千冬が説明を始めていき三時間目の授業が終わり。休み時間は先ほど一夏たちを馬鹿にしていた女子達が馬鹿にしてすまないなどと。謝罪をしてきたりしていたが一夏やオルカは「別に気にしてないから大丈夫」などと言い零治も「さつきのことを少しでも理解してくれれば構わない」などと言つていた。

そして四時間目の授業も無事に終わり。昼休みの時間

「零治、オルカ、飯を食べに行こぜ」

と誘つてくる一夏。

「そうするか」

とオルカが言つていて、リリウムが近づいてきて零治に話しかける。

「あの、三嶋零治さん。ちょっと話をしたいんですけどいいですか？」

それを聞くと零治は承諾し、一夏達には

「悪いな、一夏。先に行つて食べててくれ」

と言つて、リリウムについて行く。そして零治は屋上に来た。そし

て零治が喋りだそうとするところリリウムが

「いきなりすみません。あの、リリウム・ウォルコットと書かれた人
は知っていますか?」

とおそれおそれ訊いてくる。

「ああ、知っていますよ。俺が昔に買い物の途中に転んでチンピラ
に絡まれたところを助けて百合の花の髪飾りをあげた子の名前だっ
たな、そのとき俺はレイジ・クゼといつ名前だつたかな」と零治が言つとリリウムは少し涙目になり訊いてくる

「やっぱり、あのレイジさんなんですよ?」

「そうだ、久しぶりだな。リリウム」

と答えるとリリウムは零治の胸に飛び込み涙を流す。

「また、会えてよかったです。あのとき、あなたが死んで、とても辛かったです!」

そう言いながら零治の制服をぎゅっと掴み喋る

「本当に、本当に辛かったです」

「悪いな」

と静かに言しながら軽く頭を撫でる零治。そして少ししてリリウム
は落ち着くと顔を上げると

グウと空腹の音がした。するとリリウムが顔を真っ赤にしてあたふ
たし始める。

「い、いえ、こ、これはその、あれでして」
身振り手振りして何か言おうとしてるのを見て

「飯を食べにいくか」

そう微笑みながら言つと

「うう、はい…」

と顔を真っ赤にしたままで軽く俯き答える

「じゃあ、一夏達の所へいくか

零治がそつと言つと

「えつ? 2人でじゃないんですか!?」

と驚くリリウム

「ん？」飯は旨で食べたほうが美味しいぞ？」「

いつもも当たり前のように零治はいつの間にかしてつりウムは零治の脛をゴシッ…と蹴る

「つー…ど、どうして蹴るんだ？」

とあまりの痛さに脛を押さえるしかしリリウムがなぜ怒っているかわからない零治

「わあ、知りません」

そう言いつぱ向いてしまうリリウム。

（まさか、まさかここまで鈍感だつたとは…）

と怒る反面ショックをうけるリリウムであった。

そしてこのあと零治は何とかリリウムを説得し、一夏たちとともに昼食をとつたのであった。

「ぐぬぬ…」

放課後、そう言いながら机の上にぐつたりとつなだれる一夏。となりをチラシとみると余裕の表情のオルカ

「ほら、どうした」

と片手に参考書を持ちながら喋る零治。

「い、意味がわからん…」

そう一夏が頭を抱えていると

「ああ、織斑くんたち、まだ教室にいたんですね。よかったです」

「「「はい？」」「」

三人とも呼ばれて声がしたほうへ顔を向けると山田先生がいた

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って三人に番号が書いてある紙とキーを渡す。

「えつと、俺の部屋は決まってないんじゃなかつたですか？前の

話だと一週間は自宅通学してもらうと言つた話でしたけど」

と一夏が言つと、零治が

「一夏、そんなことしたら誘拐されるぞ」

肩を軽くすくめそう言つと

「あ～なるほど」

と納得する一夏。すると山田先生が説明しだす。

「えつと、まあ、そういうことなので政府特命もあつて寮に入れのを優先したみたいです。一ヶ月もすれば三人とも個室の方が用意できますので、それまでは相部屋で我慢してください」

「あの、部屋はわかつたんですけど、荷物のほうは一回家に帰らないと準備できな

「

「荷物のことなら、私が手配をしておいてやつた。ありがたく思え」と、一夏の言葉をさえぎり千冬が言つた。

「ど、どうもありがとうござります…」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろ?」

「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取つてください。因みに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど…えつと、その、織斑くんたちは今のところ使えません」

そう山田先生が説明すると

「え、なんですか?」

一夏がそう聞き、不思議そうにしているとオルカが

「一夏、同年代の女子と混浴したい気持ちはわかるが、我慢しろ」と一夏の肩をポンポンと叩きながら言つてくる

「お、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか!?.だ、駄田ですよ!」

「いや、入りましたくないです」

山田先生の質問に慌てて答える一夏

「ええつ？女の子に興味がないんですか！？そ、それは問題のような…」

そして山田先生がそう言つと、廊下で女子達が

「織斑くん男にしか興味ないのかしら…？」

「それはそれで…いいわね」

「まさか、オルカくんか三嶋くんに…！？」

「オル×織、いや三×織、逆もありかも！」

「三嶋くん、オルカくん、織斑くんの三角関係」

「「それだ！」」

「中学時代の交友関係を洗つて！　すぐに…　明後日までには裏づけとつて！」

などと騒いでいる。そしてオルカと三嶋は

「ま、まさか伝説のゲイヴンがここにいるとは…」

そう言い一夏の肩に乗せてた手をすぐさま放して距離をとり尻を押さえるオルカ

「人の恋愛の価値観は自由だからいいんじゃないか？」

と先ほどの位置よりも2メートルほど離れたところで言つ零治

「ち、違うって俺はノーマルだ！」

そんなやり取りをみて山田先生は

「えつと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで失礼しますね。織斑くんたち、道草をせずにちゃんと寮に帰るんですよ」

そう言つと千冬と共に教室を出て行くのをみると零治たちも部屋へ向うこじこじした。

「えーと、1025か。オルカと零治の部屋は何号室だ？」

「1026で一夏の隣だな」と言つ零治

「あつ、俺も1026だぞ」と続けるオルカ

「いいな、俺も一緒の部屋になりたかつたな」

一夏がそう言つと

「俺の尻が危なくなるからやだな」

とオルカと零治が同時に言つ

「だから違うって！そういう意味じゃねえよー。」

三人はそんなやり取りをしているといつの間にか部屋の前に來ていた。

「おつ、1025はこいか。じゃあ俺はこだから、また後でな。夕飯のときに誘いに行くよ」

「ああ、わかった待つている」

零治はそう言いオルカと共に自分の部屋へ入つていきしばらくすると隣でものすごい音がする。そして零治たちのところに夕飯を誘いに一夏が来てドアを開けるとボロボロの姿の一夏がいた。そして夕飯はリリウムも呼び零治、オルカ、リリウム、一夏、篠の5人でとり、こりこりして一日が終わる。

そして翌日の放課後

「頼む、零治、オルカ。俺に工の使い方を教えてくれー。」

と一夏が零治、オルカ、リリウムの三人で話をしているところに助けを求めるように言つてくる。

どうやら凶暴な幼馴染と剣道をやつて腕が落ちているから鍛えなおすと言われ命の危険を感じ取り零治たちのところに逃げ込んできたのである。零治は若干同情するが

「悪いな、教えてもいいんだが、クラス代表戦の後じゃなきゃ手の内を明かすことになつてしまつからな」

と丁重に断る零治

「そ、そんなあ…」

ガクツとつなだれる一夏。すると後ろから

「一夏、情けないぞ」

と言いながら追いかけてきた筈。

「一夏さん、いきなり I.S の操縦をするのも大切ですが、生身で鍛えておくのも大切なことですよ」

とリリウムが一夏を説得する。

「まあ、確かにいきなり専門外のことを付け焼刃でやるよりも、そつちのほうがいいかもしれないぞ?」

と付け加えるオルカ

「だから、せっかく幼馴染の筈さんが手伝ってくれるなら力を借りるべきです」

そつりリウムが言うと

「そうだな。みんなが、そういうなら頑張ってみるよ」とやる気になつた一夏。それをみてリリウムは筈に田で軽く合図を送ると筈は「ガクツと頷き一夏と剣道場に戻つていった。

そして零治はリリウムに少し手伝つてもらい、オルカは個人で訓練していく。

翌週の月曜。クラス代表決定戦

「 なあ、筈」

「 なんだ、一夏」

「 I.S のこと教えてくれる話はどうなつたんだ?」

「」

「 目をそらすな」

一夏は筈と特訓していくが I.S のことを教えるのをすっかり忘れてしまつていた。それについていろいろと 2 人で話していると一夏

のHSが届く。そしてさっそく装着しピットゲートに進む。

「行ってくる」

そう一夏が、篠、零治、オルカ、リリウムの方に向けて言うと

「あ…ああ。勝つてこい」

「一夏、お前の可能性をみせてみる」

「ま、気張れよ」

「頑張ってください」

と上から順に篠、零治、オルカ、リリウムの順に言うと、一夏はセシリアの方へ向かっていった。すると零治とオルカは第三アリーナのAピットから出て行こうとする。

「零治さん、オルカさん。どこに行くんですか？」

とリリウムが聞いてくる。

「いや、相手の手の内がわからないほうが楽しいかと思つてな」と零治

「俺も同じ理由だ」とオルカ

2人はそう言つとAピットから出て行った。

30分ちょっとと時間がたち。一夏対セシリアの戦いが終わった。結果は一夏がギリギリのところで負けである。

そして15分後に零治対セシリアの試合が行われることになつて、るので零治は再びAピットに来た。

「一夏、お疲れ。次は俺だな」

「ああ、零治も頑張れよ」

そして開始5分前

「では装着するか」

零治は自身のHSを呼ぶ。

「来い、ファンタズマ」

すると零治を一瞬光が包むとその姿を現した

「す、すげえ」

一夏が驚いて言つと

「ああ、まるで天使みたいだな」

そう竇がかえす。

「では、いつくるか」

零治はやつぱりドアゲートを出て行つた。

第1-2話（後書き）

ISのラウラがV-Tシステムで暴走するときには
「力が欲しいか」という台詞が

プロジェクトアームズのジャバウォックの
「力が欲しいか」という台詞とかぶるの自分だけだらうかと思つこのじる

そして次はどうとう戦闘シーンだ!
なので頑張ります。
よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

IS 何回か転生(?)する人の物語

2011年12月1日21時47分発行